

アンチファン態度とアンチファン行動の関連性

向 居 暁¹・笠 岡 美 里²

Relationships between anti-fan attitudes and anti-fan behaviors

Akira MUKAI and Misato KASAOKA

要約

ソーシャルメディアにおける有名人に対する悪質なコメントなど、アンチファンによる過激な行動が社会問題となっている。本研究は、「アンチファン態度尺度」、および、「アンチファン行動尺度」を作成し、アンチファン態度による類型化とその特徴を検討することにより、一般的に存在するアンチファン心理を明らかにすることを目的とした。探索的因子分析を行った結果、アンチファン態度尺度は、「傲慢な言動への嫌悪」、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「非常識さへの嫌悪」、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」、「自分との相違への嫌悪」、「外見への嫌悪」、「信頼性欠如への嫌悪」の7因子構造となった。また、アンチファン行動尺度は、「攻撃的アンチファン行動」、「拒否的アンチファン行動」、「オンライン批評」、「オフライン批評」の4因子構造となった。重回帰分析の結果、特に社会問題になる可能性が高い「攻撃的アンチファン行動」や「オンライン批評」は、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」の影響を強く受け、そして、「非常識さへの嫌悪」もまたそれらに少なからず影響することがわかった。さらに、クラスタ分析を用いて調査協力者をアンチファン態度によって類型化することで、アンチファン対象のジャンルやアンチファン行動のとの関連が検討された。

キーワード：アンチファン心理，对人的嫌悪感情，尺度作成

“There are two modes of establishing our reputation; to be praised by honest men, and to be abused by rogues. It is best, however, to secure the former, because it will be invariably accompanied by the latter. His calumny is not only the greatest benefit a rogue can confer upon us, but it is also the only service that he will perform for nothing.”

—Charles Caleb Colton “Lacon: or Many things in few words addressed to those who think” (Colton, 1820, p.113)

1 県立広島大学地域創生学部地域創生学科・教授

2 県立広島大学人間文化学部国際文化学科・卒業生

“名声を確立する方法は2つある。ひとつは正直者に称賛されることであり、もう一方はならず者に罵倒されることである。だが、前者を確保することが最もよい。なぜなら、後者は常に付随するからである。誹謗中傷は、ならず者が我々に付与することができる最大の利益であるばかりでなく、見返りなしで行う唯一の奉仕でもある。”
—チャールズ・カレブ・コルトン

1. 問題と目的

1.1 「アンチ」にまつわる社会問題

2021年10月下旬、IT大手のYahoo! JAPANが提供するニュースサイト「Yahoo!ニュース」において、小室圭さんと眞子さんの結婚に関するニュースを報じた複数の記事のコメント欄が非表示にされた。この機能は、同月19日にYahoo!ニュースのコメント欄の誹謗中傷対策を強化する一環として新しく導入されたもので、同社独自のAIが判定した違反コメント数などの基準に従い自動的に行われるという（Yahoo! JAPAN, 2021a）。Yahoo! JAPAN (2021a) は、「インターネットが持つ双方向性という特性を生かし、媒体各社の記事による良質な情報発信に加えて、ユーザー個人にも発信の場を提供することで、さらなる情報の価値を創ることを目指し」、2007年にコメント欄を開設したが、誹謗中傷などが相次いだため、人的なパトロールに加えて、人工知能やスーパーコンピュータ等のテクノロジーを駆使しながら、誹謗中傷をはじめとする違反コメントを1日平均約2万件削除しているとのことである。小室圭さんと眞子さんの結婚に関するこれらの記事が多くの人々の関心を集め、数多くのコメントが投稿され、そして、それらの中にAIがコメント欄を非表示にする基準にかなった誹謗中傷投稿が含まれていたのだと推測される。

誹謗中傷とは、「根拠のない悪口を言いふらして、他人を傷つけること」と定義されている（デジタル大辞泉：小学館，2019）。また、Yahoo! JAPAN (2021b) は、「Yahoo!ニュースコメントポリシー」で、「過度な批判や誹謗中傷、不快な内容」という項目を設け、Table 1のように具体例を挙げて説明している。その中には、「名誉毀損」や「侮辱」など法的に規定され、刑事処罰に関わる用語も記されているものの、内容のほとんどが、他者が傷つく内容なのかどうか、他者に不快感や嫌悪感を生じさせるかどうか、モラルや配慮に欠けるかどうかなどのように、個人の共感性や道徳性によりその判断規準が異なるものであり、実際にどのような内容が誹謗中傷に該当するかについての明確な判断は困難だと考えられる。誹謗中傷に関わる問題点の一つはこの点である。

ここで、「批判」や「批評」という言葉についても整理しておかなければならない。まず、「批判」とは、「物事に検討を加えて、判定・評価すること」や「人の言動・仕事などの誤りや欠点を指摘し、正すべきであるとして論じること」と定義されている（小学館，2019）。また、「批評」は、「物事の是非・善悪・正邪などを指摘して、自分の評価を述べること」と定義されている（小学館，2019）。これら両者の違いについて、デジタル大辞泉（小学館，2019）では、「事物の価値を判断し、論じること」では両語ともに用いられるが、「批評」は「良い点も悪い点も同じように指摘し、客観的に論じること」を意味するのに対し、「批判」は本来の意味とは異なり、現在では、「よくないと思う点をとりあげて否定的な評価をする際に使われることが多い」とされている。Yahoo! JAPAN (2021b) における「モラルや配慮に欠ける批判」（Table 1）の「批判」には、この否定的な評価という意味合いが表現されている。しかし、否定的な評価だからといって、必

Table 1 Yahoo!ニュースコメントポリシーにおける過度な批判や誹謗中傷および不快な内容 (Yahoo! JAPAN, 2021b)

<ul style="list-style-type: none"> ・特定の個人（公人を含みます）に対する人権侵害、誹謗（ひぼう）・中傷に該当しうる投稿 ・特定の地域や家柄、障がい者、性別、職業、LGBTなどへの差別的な内容を含む投稿 ・特定の民族や国に対する差別やヘイトスピーチにあたる投稿 ・被害者・被害者の親族、加害者・加害者の親族および関係者などに対する心ない投稿や不謹慎な投稿 ・他人に不快感・嫌悪感を生じさせるような表現を用い、他人やほかの利用者を攻撃する投稿 ・穏当さを欠く苛烈な表現や品位を欠く表現を用いた投稿 ・モラルや配慮に欠ける批判や悪口、全否定的な投稿
<p>投稿例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の自尊心を根本的に否定し、尊厳を傷つける投稿は禁止しています。 ・具体性がなく、乱暴な言葉で言い捨てたり、人格批判になっているような投稿は禁止しています。 「こんな最下層の人間はゴミ以下。自殺しろ。」 「キモい。」 ・配慮に欠ける推測で、本人や関係者が目にしたら傷つくような投稿や、遺族感情を逆なでる投稿、亡くなった方をおとしめたりする投稿は禁止しています。 「(訃報や災害の発生に対して) おめでとうございます。」 「(亡くなった方に対して) 死んでくれてよかった。」 「(事件や事故の被害者に対して、背景事情が分からないにもかかわらず) 被害にあったのは本人に責任があるからだ。」 <p>※相手が著名人や企業、団体の場合も、根拠のない批判や度を過ぎた批判を行った場合、名誉毀損や侮辱に該当する可能性があります。氏名や法人名を伏せ字にしても、名誉毀損が成立する場合があります。</p>

ずしも、誹謗中傷にあたるわけではない。事実に基づいて「批判（批評）」することは、時に他者にネガティブな感情をもたらすことはあるものの、結果的により適切な代替案を提示することにつながる創造的な試みであると考えられることもできる。心理学や教育学においては、対象を「批判（批評）を通して深められる思考」（道田，2003）を意味する、批判的思考という概念があり、その教育における重要性が指摘されていることから（楠見，2018）、批判すること自体は私たちにとって必要な知的な営みである。

しかし、誹謗中傷は、その語義に示されているように、人を傷つける。宮内庁は、10月1日に眞子さん（当時は、秋篠宮家の長女眞子さま）が、長期にわたる誹謗中傷（を感じる出来事）が原因とされる「複雑性PTSD（心的外傷後ストレス障害）」と診断されていたことを明らかにした（e.g., 朝日新聞デジタル，2021）。また、2020年5月に『テラスハウス』に出演中だったプロレスラーの木村花さんは、SNS上で番組の内容をきっかけとした誹謗中傷を繰り返し受け、それを苦に自ら命を絶ったといわれている。その他にも、堀ちえみさん、川崎希さん、春名風花さん、西田敏行さん、スマイリーキクチさんに対する悪質な誹謗中傷には法的措置がとられたとの報道もある。また、東京オリンピックに出場する選手に対する誹謗中傷が問題視されたことは記憶に新しい。このように、有名人に対する誹謗中傷問題に関する事例を挙げれば、枚挙に暇がない。また、このような誹謗中傷は、期せずして「有名人」になってしまった者へも向けられる。例えば、Table 1にもあるように、犯罪加害者や犯罪被害者とその親族、また、最近ではコロナウイルス感染症の患者もまた、誹謗中傷の対象となってきた。私たちにもいつ何時、その刃が向けられるのかわからないような状況である。

そして、誹謗中傷は、その語義に示されているように、根拠のない悪口である。情報通信技術（ICT）が可能にした匿名でのコミュニケーションや情報発信により、真実を報じる記事と同様に、誹謗中傷を含む、根拠が不明瞭なネガティブな記事やゴシップのような個人のプライバシーを侵害するような記事もまた、SNSなどのソーシャルメディアを通じて広範囲に、しかも短時間で広まる。そのような記事は、Twitterのような個人のソーシャルメディアにネガティブな反応、

つまり、「アンチ」コメントが付与されて掲載されることもある。いわば、「ならず者の罵倒」によって、瞬く間に、多くの人々の知るところとなる。コルトンが生活を送っていた200年前前の社会と決定的に異なるのは、ニュース記事が届く範囲とその速度であろう。

ソーシャルメディアを中心に、有名人に対する誹謗中傷をはじめとした悪質なコメントや有名人の個人情報特定し、プライベートをSNSで無断公開するなど、いわゆる、アンチファンによる過激な行動が後を絶たず、大きな社会問題となっている。また、ソーシャルメディアでは、意図する、意図しないに関わらず、デマ情報を容易に拡散することが可能であり、結果として、有名人に深刻な被害を与えることもある。時に、プロバイダ責任制限法の改正や侮辱罪の厳罰化が発表されるなど、法整備の改善はみられるものの、まだまだ十分にはほど遠い。ICTの急速な進展により「一億総評論家」時代（大宅・大宅, 2017）が到来した現代社会では、発展的結果をもたらす批判もあれば、誹謗中傷に値するようなものも混在し、そして、正義感に基づくものもあれば、ただの嫌がらせが動機のものもあり、そのような行動に関わる心理学的理解なしでは、対応は不十分にならざるを得ない。さらに、このようなインターネット上という「公の場」における誹謗中傷の氾濫は教育上の問題もはらんでいる。たとえ、正義感に基づく非難であったとしても、また、非難される側に非があるとしても、度が過ぎたバッシングやそれをはやし立てる構図は、いじめのそれと類似しており、「相手に非があれば攻撃してもよい」といった誤った価値観の習得やいじめの肯定などといったような、子どもたちの精神の発達に悪影響を与える可能性も否定できない。このような背景から、有名人（有名になってしまった者も含めて）に対する、「アンチ」行動の心理学的メカニズムを解明することは非常に重要な課題だと考えられる。

1.2 ファンとアンチファン

ファンとは、向居・竹谷・川原・川口（2016）によると、「スポーツ・演劇・映画・音楽などで、ある特定の人物（グループ、チームを含む）に対して魅力を感じている人」と定義される。それに対して、アンチファンとは、そのようなある特定の人物に対して嫌悪感情を抱く人と定義することができるだろう（向居, 2020）。ファン対象、または、アンチファン対象になる人物は、マスメディアを介して有名性が付与された、いわゆる「スター」のような「有名人」がほとんどを占めていたが、近年では、メディアを介さずともリアルスペースで「会う」ことができたり、また、さほど一般的に「有名」でなくてもファン対象となりうるものが指摘されている（向居他, 2016）。ICTの急速な進展に伴い、SNSなど、実際の友人と同様のコミュニケーションツールを用いてファン対象とコミュニケーションをとることも可能となった。加えて、一般的には、ファン対象を指す、「推し」という用語が身近な人にも使われ始めるなど、「ファン心理」が適用可能な範囲が広がっていると考えられる。ファン対象、そして、アンチファン対象は私たちの日常生活に溶け込んでいるのである。小城（2002）が指摘したように、程度の差はあれども、ファン心理は誰にでも一般的に存在すると仮定される。アンチファン心理も同様に、誰彼なしに、ある程度共通して存在するものであると考えられる。

ファン心理研究は、メディア研究、対人魅力研究、流行研究、社会文化研究など、さまざまな学問分野や理論が融合したところに位置している（小城, 2018）。ファン心理研究は、社会学や文化論の文脈で議論された数々の事例研究を経て、2000年代以降、「メディアを介した対人魅力」という文脈で心理学における実証的研究が実施されるようになった。有名人をはじめとしたファン対象となるような人々は、有力なメディアや文化において主要な地位を占めることが多いだけ

でなく、教育や経済活動に影響力を持つとされ、ポップカルチャーにおいて確固たる地位を確立しているにもかかわらず、どのように個人がファン対象に対して心理学的に関与しているかに関する構造的理解はいまだ十分になされていない (e.g., Maltby & Day, 2017)。

また、アンチファン心理に密接に関係する対人嫌悪感情の研究数は多くはなく (河野・羽成・伊藤, 2013)、それに伴い、アンチファン心理の研究はほとんどなされていないのが現状である。Gray (2003, 2005) は、メディア研究におけるテキスト (例えば、二次創作など) 分析の観点から、ファン心理研究に重きが置かれるなか、憎しみや嫌悪に基づいた批判とそれによって形成されるコミュニティの有用性を指摘しながら、必要不可欠なものとしてアンチファンを対象にした研究の重要性を唱えた (Harman & Jones, 2013)。Gray (2005) は、対象 (この場合は、テキスト) に対する憎しみや嫌悪は、賞賛的で感情的な関係性と同等に強力となり得るし、同等の活動や、同一化、意味、そして「効果」を生み出したり、同等にコミュニティやサブカルチャーを強力で支えることができると指摘している。このことは、いかなるファン・アンチファン対象を対象とした研究にあてはまるといっても過言ではなく、ファン心理、および、アンチファン心理の包括的理解の必要性を示唆するものである。

加えて、インターネットを介して発信された有名人の個人情報 (住所など) は、熱狂的なファンや、悪意を持つアンチファンによって、オフラインにおける迷惑行為に利用可能であり、直接的な被害に発展しかねない。加えて、以前までは熱狂的なファンであったにもかかわらず、スキャンダルなどの出来事をきっかけにして、アンチファンになることもあると考えられる (小城・薊・小野, 2010)。ファン心理とアンチファン心理は、このような点において表裏一体の関係だといえる。

1.3 アンチファン心理と対人嫌悪感情

アンチファンは、本研究では、「スポーツ・演劇・映画・音楽などで、ある特定の人物に対して嫌悪感情を抱く人」と定義された (向居, 2020)。ファンがファン対象に対して好意的な感情を抱くように、アンチファンはアンチファン対象に対して嫌悪感情を抱く。嫌いな人物に対する認知は、好きな人物に対する認知と別次元にあることも指摘されており (水野 1999)、アンチファン心理についてはファン心理とは別に検討する必要があると考えられる。アンチファン心理を明らかにしていく上で、まず、その根幹をなす対人嫌悪感情について理解することから始めなければならないだろう。

対人嫌悪感情の重要な機能は、広義の有害な他者を避けることにあるとされる (河野・羽成・伊藤, 2014)。また、対人嫌悪感情は、社会における互惠性の破綻 (例えば、他者から騙され不意を突かれ、資源を搾取、略奪されることなど) を防ぐために、互惠の関係を築き得る個人を選別する役割を果たすとも考えられている (河野, 2019)。嫌悪感情は、元来、有害な物質の経口摂取を阻止する機能をもつ「まずい味」(苦味や酸味) に対する反応として発生し、病気や感染の原因となる対象物 (細菌やウイルスなど) に対する嫌悪、人間行動の動物的側面を想起させる動物的性質の対象物 (身体分泌物や身体損傷など) に対する嫌悪、そして、対人嫌悪や道徳的嫌悪 (社会的規範や文化的規範からの逸脱行為など) へと拡張された (e.g., Rozin, Haidt, & McCauley, 2000)。いずれの対象についても、嫌悪感情を抱くことによって、接触回避や接触防止につながり、結果的に適応に寄与していると考えられる (河野他, 2014)。すなわち、嫌悪感情は、毒物摂取を回避する身体的防衛や、人間の尊厳を維持する精神的防衛の機能だけでなく、道

徳的・倫理的判断を共有する内集団の秩序を維持する機能をもつことで、自らが所属する社会や文化の維持・防衛に貢献していると考えられている(今田, 2019)。

対人嫌悪は、このような重要な機能を有するにもかかわらず、対人魅力と比較するとあまり研究対象となっていない。まず、対人魅力研究の枠組みにおいて、Anderson (1968) は、アメリカの大学生に555語の性格特性語について、好ましさの評定を求めた結果、最も評定値が高かった3語は、sincere (誠実な)、honest (正直な)、understanding (理解力のある)であり、最も評定値が低かった3語は、liar (嘘つき)、phony (いんちき)、mean (意地悪)であることを示した。この研究結果から豊田 (1998) は、少なくともアメリカにおいては、「正直-嘘つき」という次元が対人魅力において重要であると解釈できること、また、日本で実施された研究においては「思いやりのある」や「やさしい」という特徴が好かれる特徴としてあげられていること(松井・江崎・山本, 1983)から、対人嫌悪研究の枠組みで、日本においてどのような人物が嫌われるのかについて検討した。その結果、「自分勝手・わがまま」という特性語が、女性から嫌われる男性、女性から嫌われる女性、男性から嫌われる男性、男性から嫌われる女性のすべてにおいて共通してあげられていたことから、日本においては「思いやりの有無」という次元が好き嫌いを判断する次元として重要であると主張した。また、斎藤(2003)は、これまでの研究が人から嫌われると推測される一般的他者の特徴を扱っているに過ぎず、実際に自分が嫌いな他者に対して抱く嫌悪感情と解離する可能性があることを指摘し、実際に嫌悪感情を抱いた特定の他者の特徴について質問紙調査を用いて検討し、対人的嫌悪尺度を作成した。その結果、対人的嫌悪尺度は、「自分との相違による嫌悪」、「相手への妬みによる嫌悪」、「相手の傲慢さによる嫌悪」、「相手の自己中心性による嫌悪」、「相手の主張過剰による嫌悪」、「自分との類似による嫌悪」、「相手の外見による嫌悪」、そして、「相手の話し方による嫌悪」の8因子で構成されることがわかった。これらの知見について、斎藤は、例えば、「自分との相違による嫌悪」については、態度の類似性が対人魅力を規定する要因であること(Byrne, 1971)で説明し、また、「相手の外見による嫌悪」については、対人的な好悪感情における顔の役割が大きいこと(e.g. 川西, 1993)によって解釈した。河野他(2014)は、これらの因子で示される特徴が、自分の社会的な立場や利益が直接的、または、間接的に相手から浸食される事態を示すものの、一般的にはさほど重大な社会的損害を与えないような、些細なものほとんどであることを指摘し、このことは、人間が自己の社会的立場と利益についてかなり敏感であり、それらが大きく損なわれる可能性に対して、未然に回避・防止すべく嫌悪感情を発動させていることを示唆するものであると述べた。

Haidt (2003) は、嫌悪を、軽蔑や怒りとともに、道徳逸脱(侵害)によって喚起される他者糾弾感情とみなし、さらに自己意識的感情(恥、周知、罪悪感)をあわせて、両者を道徳感情とみなした。自らの行動を、内在化された社会規範、文化規範によって検証し、それらからの逸脱があると判断した場合は自己意識的感情が喚起されるのに対し、他者の行動や外的事象を検証し、内在化された社会規範、文化規範からの逸脱(侵害)があると判断された場合は他者糾弾感情が喚起されると説明した。そして、他者糾弾感情は、怒りならば攻撃、軽蔑あるいは嫌悪ならば無視、拒否、逃避などの行動が引き起こされるとみなした(RozinやHaidtの嫌悪感情に関する理論については、今田, 2019参照)。本研究における文脈で考えると、自己の社会的立場と利益の侵害行為、社会的規範や文化的規範からの逸脱行為があると判断された対象がアンチファン対象となり、他者糾弾感情が喚起されたときに、アンチファン対象に対する拒否的な行動、苦情行動、批判や誹謗中傷、迷惑行動のようなアンチファン行動が生じると仮定できるだろう。

1.4 本研究の目的

過激なアンチファン行動が、ICTの進展した現代社会において、深刻な問題となって久しい。しかし、アンチファン心理に密接に関係する対人嫌悪感情を扱った研究は、対人魅力を扱った研究よりもかなり少なく、アンチファン心理の構造的理解に関する研究もほとんど実施されていない。そこで本研究は、アンチファン態度尺度、および、アンチファン行動尺度を作成し、それらの関連性を検討すること、そして、アンチファン態度による類型化とその特徴を検討することによって、一般的に存在するアンチファン心理を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象者

2019年11月から12月に実施された質問紙による対面調査の対象者は、広島県内の大学生449名（男性107名、女性333名、不明9名： $M_{age}=21.74$ ($SD=1.16$, $range=18-30$))であった。また、2020年6月から2021年8月においてGoogle Formを利用して実施されたウェブ調査の対象者は、376名（男性75名、女性297名、不明4名： $M_{age}=21.17$ ($SD=4.30$, $range=18-60$))であった。そのうち、途中で回答を中止した者、調査者の指示や質問紙に記載された教示に従っていないと判断された者、項目文をきちんと読んでいるかを確認するための項目（三浦・小林、2015参照）に適切な回答をしなかった者など、70名のデータを削除した結果、分析対象者は745名（男性150名、女性590名、不明5名： $M_{age}=20.69$ ($SD=3.18$, $range=18-60$))となった。分析対象者の職業は、大学生が703名（回答を求めなかった2019年度の協力者を含む）、社会人34名、その他7名であった。また、分析対象者の居住地については、495名が無回答（回答を求めなかった2019年度の協力者を含む）であり、広島県203名、香川県16名、東京都12名、その他府県19名であった。すべての調査対象者には、倫理的配慮や回答内容の匿名性の保証に関する説明を行ったうえで、調査協力への同意について意思確認が行われた。

2.2 調査内容と手続き

2019年度に実施された質問紙調査、および、2020年度・2021年度に実施されたウェブ調査の双方において、「嫌いな有名人に関する調査」と題して調査が実施された。フェイスシートにおいては、年齢と性別のほか、ウェブ調査のみで、職業、および、居住地の県名の回答を求め、そして、増田・坂上・森井（2019）にしたがって、冒頭宣誓（「このような調査においては、うそをついたり、質問を読まないで、いい加減な回答をしたりする方がいることが問題となっています。あなたは質問をきちんと読んで、真面目に答えていただけますか？ 真面目に答えていただけるのであれば、以下をチェックしてください。」という項目にチェックすること）を求めた。質問紙調査においては、嫌いな有名人に関する質問項目の前に、別の関連した研究（向居、2021）のためにSNS利用に関する項目への回答が求められた。

嫌いな有名人についての質問として、「最も嫌いな有名人（タレントやアーティスト、スポーツ選手など）」の具体名と、その対象のジャンルを「ミュージシャン」、「スポーツ選手」、「俳優（女優も含む）」、「アイドル」、「タレント」、「お笑いタレント」、「モデル」、「アナウンサー」、「政治家」、「ユーチューバー」、「その他」の中から選択してもらった。さらに、調査対象者に、記述してもらった最も嫌いな有名人への嫌悪度を5段階（1：やや嫌い～5：非常に嫌い）で評定し

てもらったことに加え、その対象を嫌いな期間について月単位で記入してもらった。加えて、回答者が嫌悪感情を実感しながら回答できるよう、その有名人の嫌いなどをできるだけ詳しく自由記述してもらった。

続いて、アンチファン態度尺度、および、アンチファン行動尺度を作成するために、アンチファン態度に関する項目121項目、アンチファン行動に関する項目21項目についての回答を求めた。これらの項目は、向居他（2016）のファン態度尺度とファン行動尺度の項目をアンチファンに該当する内容に変更したものを基本とし、斎藤（2003）の嫌いな他者の特徴についての尺度、豊田（1998）の大学生における嫌われる男性および女性の特徴、増井・田村・マーチ（2019）の日本語版ネット荒らし尺度（J-GAIT-R）を参考にしながら、独自の項目を加えて作成されたものである。それぞれの項目について、調査対象者自身にどのくらいあてはまるかを「1：全くあてはまらない」、「2：ほとんどあてはまらない」、「3：あまりあてはまらない」、「4：少しあてはまる」、「5：よくあてはまる」、「6：非常によくあてはまる」の6段階で評定を求めた。また、項目文を読んでいるかを確認するための項目（例：「この項目は、誤回答防止のためのものです。一番左の1に丸をつけてください。」などと指示する項目）も3項目含まれていた（三浦・小林、2015参照）。

2019年度に実施された調査においては、質問紙は、ほとんどの大学生に対しては講義時間を利用して一斉配布され、その場で回収、そして、その他の大学生については、個別に配布され、回答後に回収された。また、2020年度・2021年度のウェブ調査では、主に第一著者の授業内において、回答への協力が求められた。また、一部のウェブ調査協力者から人づてに知人を芋づる式に紹介してもらおう方法（雪だるま式サンプリングと呼ばれることがある）を用いて、回答への協力が求められた。

3. 結果

3.1 アンチファン対象と嫌悪度、および、嫌悪期間

本研究のすべての調査において、具体的に挙げられた嫌いな有名人（以下、アンチファン対象）は266名であり、その上位13名はTable 2に記してある。嫌いな有名人として挙げられたカテゴリーは、「お笑いタレント」31.68%、「タレント」17.45%、「俳優（女優も含む）」14.09%、「ミュー

Table 2 最も嫌いな有名人の上位13名

	2019 (n=449)	2020以降 (n=376)	合計 (N=745)	全体 (%)
安田大サーカス クロちゃん	60	37	97	13.02
坂上忍	26	34	60	8.05
宮根誠司	14	14	28	3.76
アンジャッシュ 渡部	0	22	22	2.95
鈴木奈々	13	6	19	2.55
ゆりやんレトリィバァ	8	5	13	1.74
川谷絵音	9	3	12	1.61
土屋太鳳	7	4	11	1.48
コロチキ ナダル	4	6	10	1.34
フワちゃん	1	8	9	1.21
寺田心	6	3	9	1.21
東出昌大	0	9	9	1.21
和田アキ子	5	4	9	1.21

ジシャン」6.85%、「ユーチューバー」4.97%、「アナウンサー」4.83%、「アイドル」4.70%、「モデル」3.49%、「政治家」3.49%、「スポーツ選手」3.22%、「その他」5.23%（「声優」1.07%、「元アナウンサー」0.94%、「実業家」0.67%など）であった。

アンチファン対象に対する嫌悪度評定（1：やや嫌い～5：非常に嫌い）の平均値は、3.50（ $SD=1.29$ ）であり、その対象を嫌いな期間の平均値は31.28か月（ $SD=34.00$, median=24.00, range=0.25-324.00）であった。

3.2 アンチファン態度尺度

アンチファン態度に関する質問項目計121項目について、2019年度に収集したデータを予備的に分析した結果（向居，2020）を考慮しながら、各項目が極端に偏った得点分布を示さないことや、各項目で内容が重複していないことを確認した結果、探索的因子分析を実施する96項目を選択した。スクリープロットから第1因子の固有値（26.45）が大きいと判断されたため、堀（2005）を参考にし、MAPで示された11を下限の因子数、対角SMC並行分析で示された15を上限の因子数として、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を試みたが、いずれの分析においても解釈可能な結果は導き出されなかった。そこで、因子数を減少させながら、再度因子分析を試みた。その結果、解釈可能性などの観点から7因子構造が妥当であると判断され、因子負荷量の絶対値が.40に満たない項目や複数の因子に多重負荷している項目計45項目が削除された（Table 3）。

第1因子は、「Aは口調が強い」、「Aは攻撃的である」、「Aは態度が偉そうである」、「Aは人の悪口を言う」などのように、アンチファン対象の傲慢で攻撃的な立ち居振る舞いを示す項目に強く負荷していたため、「傲慢な言動への嫌悪」と命名された（12項目、 $\alpha=.926$ ）。第2因子は、「Aの作品（音楽・本・演技・プレーなど）は共感できない」、「Aの作品（音楽・本・演技・プレーなど）はレベルが低いと思う」、「Aは実力がない」などのように、アンチファン対象の作品、パフォーマンス、能力の低さを酷評する項目に強く負荷していたため、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」と命名された（10項目、 $\alpha=.894$ ）。第3因子は、「Aは常識がなさすぎる」、「Aは無知すぎる」などのように、アンチファン対象の非常識さに対する評価に関する項目に強く負荷していたため、「非常識さへの嫌悪」と命名された（4項目、 $\alpha=.847$ ）。第4因子は、「Aのアンチファン同士で盛り上がることは楽しい」、「Aのアンチファンと実際に出会うと、うれしくなる」、「Aが炎上しているのを見ると嬉しい」、「Aの悪評が広まればよい」などのように、アンチファン対象に対する嫌悪感情を共有し、アンチファン対象が不幸になることを喜ぶことに関する項目に強く負荷していたため、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」と命名された（8項目、 $\alpha=.869$ ）。この第4因子は、他の因子と異なり、アンチファン対象のある特定の特徴や行動に対する嫌悪ではない項目群から構成されていた。第5因子は、「Aは性格的に自分と異なっている」、「Aとは価値観が異なると思う」などのように、アンチファン対象と自分自身の価値観や考え方が異なることに関する項目に強く負荷していたため、「自己との相違への嫌悪」と命名された（6項目、 $\alpha=.829$ ）。第6因子は、「Aは目鼻立ちが整っていない」や「Aはスタイルが悪いと思う」などのように、アンチファン対象の外見の特徴に関する項目に強く負荷していたため、「外見への嫌悪」と命名された（6項目、 $\alpha=.887$ ）。そして、第7因子は、「Aは性格に裏表がある」、「Aは女たらし（男たらし）である」、「Aはうそつきである」などのように、アンチファン対象が、男女関係などにおいて信用するに足らないことに関する項目に強く負荷していたため、「信頼性欠如への嫌悪」と命名された（6項目、 $\alpha=.836$ ）。したがって、これらの7因子51項目からなる

Table 3 アンチファン態度に関する項目の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	共通性
F1 傲慢な言動への嫌悪 ($\alpha = .926$)								
91. Aは口調が強い。	.930	.026	-.071	-.015	.016	-.079	-.117	.721
22. Aは攻撃的である。	.866	-.082	-.144	.000	-.062	-.100	.115	.591
118. Aは思ったことをズバズバ言う。	.858	-.002	-.030	.003	.045	-.120	-.172	.628
43. Aは人のしたことに対して批判をする。	.819	-.066	-.012	-.028	-.140	.054	.066	.589
75. Aは態度が偉そうである。	.783	-.010	-.104	.032	.076	.008	.052	.635
52. Aは人の悪口を言う。	.764	-.070	-.025	-.089	-.137	.113	.237	.632
114. Aは気にさわることを言う。	.574	.088	.104	.127	.087	-.080	-.027	.556
104. Aは自信過剰である。	.549	.119	.076	-.002	.094	-.009	.131	.589
84. Aの話はしつこい。	.542	.082	.145	.049	.031	.154	-.130	.534
34. Aは過度に自己主張する。	.521	.021	.139	.003	.169	.008	-.042	.505
61. Aはうるさい。	.481	.051	.196	-.077	.118	.182	-.234	.474
F2 作品の質と能力の低さへの嫌悪 ($\alpha = .894$)								
70. Aの作品（音楽・本・演技・プレーなど）は共感できない。	.027	.879	-.037	-.098	.008	-.004	.009	.687
97. Aの作品（音楽・本・演技・プレーなど）はレベルが低いと思う。	.021	.807	.179	-.061	-.195	.057	-.028	.654
117. Aの作品（音楽・本・演技・プレーなど）は不快である。	.020	.772	-.045	-.016	-.041	.108	-.012	.630
3. Aの作品（音楽・本・演技・プレーなど）には感動しない。	-.046	.758	.021	-.199	.111	-.069	.081	.509
2. Aは実力がない。	-.012	.642	.287	-.020	-.167	-.046	-.030	.459
71. Aのために時間やお金を犠牲にしたくない。	-.005	.581	-.084	-.069	.150	.022	.021	.379
98. Aに関するものはお店に置いてほしくない。	.006	.543	-.004	.287	-.067	.000	.044	.529
1. Aが今以上に有名になってしまったら、よい気分がしない。	-.036	.486	.050	.238	-.021	-.124	.026	.356
78. Aが人気者であるのは運が良いだけである。	.012	.464	.058	.208	-.063	.026	-.001	.384
144. Aのためにお金を使う人の気が知れない。	-.033	.452	-.004	.144	.102	.152	.009	.464
F3 非常識さへの嫌悪 ($\alpha = .847$)								
62. Aは常識がなさすぎる。	.026	.005	.763	-.066	.116	-.015	.056	.717
93. Aは無知すぎる。	-.045	.173	.719	.091	.017	-.101	-.073	.573
64. Aの言動は不可解である。	-.007	.059	.545	.003	.215	.048	.088	.592
39. Aは自制心がない。	.160	.024	.459	.044	.067	-.035	.198	.554
F4 嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ ($\alpha = .869$)								
28. Aのアンチファン同士で盛り上がることは楽しい。	-.076	-.166	.000	.837	.012	.045	.020	.584
77. Aのアンチファンと実際に会おうと、うれしくなる。	-.094	-.118	.021	.823	.008	.080	-.049	.576
24. Aが炎上しているのを見ると嬉しい。	.126	.000	.018	.793	-.067	-.028	.002	.677
7. 他のAのアンチファンに親近感を感じる。	.004	-.061	.009	.723	.185	-.069	-.048	.504
50. Aの悪評が広まればよい。	.113	.120	.044	.675	-.133	.036	.040	.652
134. Aのファン同士で盛り上がっているのを見ると不愉快である。	-.026	.192	-.029	.523	-.076	.012	.006	.381
145. 私のAに関する投稿やコメントが攻撃的だと思う人もいるが、私は面白いと思う。	-.018	-.121	.079	.485	-.039	.153	.053	.285
10. 他の人よりAを嫌う気持ちは強い。	.070	.212	-.131	.436	.137	-.093	-.036	.320
F5 自己との相違への嫌悪 ($\alpha = .829$)								
58. Aは性格的に自分と異なっている。	-.028	-.123	.042	-.006	.773	.043	.010	.553
110. Aとは価値観が異なると思う。	.016	.146	-.030	-.022	.728	-.067	.002	.595
81. Aは自分と考え方が違う。	.042	-.030	.103	-.017	.679	-.024	.034	.553
12. Aは行動の仕方が自分と異なっている。	-.009	-.165	.102	.060	.623	.036	.099	.456
33. Aは感情の表し方が自分と違う。	.103	-.058	.072	.030	.538	-.011	-.015	.369
132. Aは自分と嗜好（好み）が違う。	-.004	.212	-.027	-.036	.454	.055	.000	.343
F6 外見への嫌悪 ($\alpha = .878$)								
135. Aは目鼻立ちが整っていない。	-.015	-.016	-.032	.029	-.017	.873	-.032	.715
49. Aはスタイルが悪いと思う。	.020	-.150	.133	.011	-.083	.847	-.025	.633
95. Aの体型が嫌いである。	-.062	.011	.087	.011	-.089	.781	.052	.628
111. Aの顔が嫌いである。	-.011	.188	-.219	.071	.092	.651	.038	.626
79. Aの外見は、私にとって、魅力的ではない。	.075	.162	-.304	-.052	.200	.593	-.048	.513
11. Aの服装、髪形やメイクなどが嫌いである。	-.137	.201	.002	.129	.110	.443	.052	.460
F7 信頼性欠如への嫌悪 ($\alpha = .836$)								
29. Aは性格に裏表がある。	.062	-.033	-.075	.105	.005	-.026	.784	.643
8. Aは女たらし（男たらし）である。	-.156	.056	-.002	-.038	.093	-.044	.760	.539
31. Aはうそつきである。	.007	-.040	.156	-.117	-.021	.113	.725	.644
5. Aは同性の前と異性の前では態度が違う。	.048	.039	.028	-.075	-.020	.101	.669	.520
17. Aはずるいところがある。	.286	-.035	-.051	.053	-.007	-.006	.554	.476
21. Aはあざとい。	-.168	.153	-.066	.191	.060	-.210	.464	.274
	因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
	F1	-						
	F2	.332	-					
	F3	.574	.408	-				
	F4	.322	.537	.320	-			
	F5	.502	.479	.464	.219	-		
	F6	.310	.546	.311	.360	.358	-	
	F7	.378	.267	.512	.389	.350	.336	-

尺度を「アンチファン態度尺度」とした。

3.3 アンチファン行動尺度

アンチファン行動に関する質問項目計21項目について、MAPで示された2を下限の因子数、対角SMC並行分析で示された6を上限の因子数として、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施したところ、第4因子が2項目で構成される問題（Velicer & Fava, 1998）はあるものの、解釈可能性などの観点から4因子構造が妥当であると判断された（Table 4）。

第1因子は、「面白いので、AやAのファンが気分を害したり、不愉快になるような内容のウェブサイトへ他人を誘導したことがある」や「Aを追っかけて、プライベートをインターネット上で拡散している」などのように、オンライン・オフラインに関わらず、アンチファン対象やそのファンに対する攻撃的な迷惑行動に関する項目に強く負荷していたため、「攻撃的アンチファン行動」と命名された（9項目、 $\alpha = .846$ ）。第2因子は、「SNSで、Aのファンに対して率直な批評をし、それを投稿したり、共有（リツイートやいいねなど）したりする」や「SNSでAに関す

Table 4 アンチファン行動に関する項目の因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

項目内容	F1	F2	F3	F4	共通性
F1 攻撃的アンチファン行動 ($\alpha = .846$)					
48. 面白いので、AやAのファンが気分を害したり、不愉快になるような内容のウェブサイトへ他人を誘導したことがある。	.794	-.080	-.038	.031	.559
107. Aを追っかけて、プライベートをインターネット上で拡散している。	.728	.027	-.026	-.098	.547
30. A自身のSNS、動画投稿サイト、ホームページ、ブログなどのコメント欄で、Aのファンと対立することがある。	.704	-.181	-.028	.125	.383
119. Aに否定的な内容の手紙を書いたり、迷惑になるような物を送ったりする。	.616	.079	.001	-.069	.440
15. SNSでAのアンチファンと「友達」になったり、「フォロー」し合ったりする。	.565	-.113	.078	.108	.279
140. Aに関することで、インターネット上（ソーシャルメディアやニュースサイトなど）のコメント欄やニュースフィード（SNSなどのタイムラインに表示される新着情報や更新情報）で人々を困らせたことがある。	.562	.101	-.001	-.058	.391
74. Aの作品（CD・本・ビデオなど）をわざと購入し、それを傷つけたり、捨てたりする。	.509	.140	.063	-.058	.372
37. 面白いので、Aに関して物議をかもしようなネタをインターネット上で共有したり、送ったことがある。	.435	.220	.007	.020	.368
136. A自身のSNS、動画投稿サイト、ホームページ、ブログなどに率直なコメントを書き込む。	.401	.263	-.039	.024	.370
F2 オンライン批評 ($\alpha = .735$)					
88. SNSで、Aのファンに対して率直な批評をし、それを投稿したり、共有（リツイートやいいねなど）したりする。	.163	.712	-.007	.005	.686
59. SNSでAに関する否定的な情報や、率直な批評を投稿したり、共有（リツイートやいいねなど）したりする。	.129	.600	-.017	.029	.486
83. SNSでAに対する否定的なコメントを検索する。	.168	.431	-.035	.092	.339
F3 拒否的アンチファン行動 ($\alpha = .780$)					
42. Aの作品（音楽・本・演技・プレーなど）を、自分から見たり聴いたり読んだりすることは絶対ない。	-.037	-.084	.692	.020	.474
51. テレビ番組（ドラマ・映画・音楽番組・バラエティ・試合中継等）にAが出てくるとチャンネルを変える。	-.031	.032	.689	.090	.522
67. Aが出演しているCMの商品や、Aが使用している商品は買わない。	.052	.086	.635	-.003	.442
130. Aの作品（CD・本・ビデオなど）は、絶対に買わない。	-.099	-.011	.568	.112	.368
6. テレビ、雑誌、SNSなどを通して、Aに関する情報を絶対にチェックしない。	.022	-.116	.548	-.020	.285
94. 友人と、Aに関する話をすることは絶対ない。	.063	-.032	.521	-.292	.279
143. Aのファンとは絶対に仲良くしない。	.104	.192	.432	.021	.304
F4 オフライン批評 ($\alpha = .694$)					
23. 友人や家族との会話の中で、AやAの作品に対する率直な批評をしている。	.028	-.043	.036	.821	.674
101. 友人や家族との会話の中で、Aのファンに対して率直な批評をしている。	.006	.162	-.012	.595	.438
因子間相関	F1	F2	F3	F4	
F1	-				
F2	.651	-			
F3	.052	.184	-		
F4	.116	.313	.260	-	

る否定的な情報や、率直な批評を投稿したり、共有（リツイートやいいねなど）したりする」などのように、SNSのようなソーシャルメディアにおけるアンチファン対象やそのファンに対する否定的な批評行動や情報の共有に関する項目に強く負荷していたため、「オンライン批評」と命名された（3項目、 $\alpha = .735$ ）。第3因子は、「Aの作品（音楽・本・演技・プレーなど）を、自分から見たり聴いたり読んだりすることは絶対がない」、「テレビ番組（ドラマ・映画・音楽番組・バラエティ・試合中継等）にAが出てくるとチャンネルを変える」、「Aが出演しているCMの商品や、Aが使用している商品は買わない」などのように、アンチファン対象の作品やパフォーマンス、アンチファン対象が関係する事物に対する拒否的な行動に関する項目に強く負荷していたため、「拒否的アンチファン行動」と命名された（7項目、 $\alpha = .780$ ）。そして、第4因子は、「友人や家族との会話の中で、AやAの作品に対する率直な批評をしている」および「友人や家族との会話の中で、Aのファンに対して率直な批評をしている」のような、オンラインではなく、リアルスペースの身近な他者とのアンチファン対象に対する批評行動に関する項目に強く負荷していたため、「オフライン批評」と命名された（6項目、 $\alpha = .694$ ）。したがって、これらの4因子21項目からなる尺度を「アンチファン行動尺度」とした。

3.4 アンチファン態度尺度・アンチファン行動尺度の各因子の特徴

アンチファン態度尺度、および、アンチファン行動尺度の下位尺度の基本統計量をTable 5に示した。6段階評定のため、尺度中点（以下、中点）の3.5を超えるとより「あてはまる」と判断され、下回るとより「あてはまらない」と判断されたことを示す。アンチファン態度の下位尺度の尺度得点では、「嫌悪共有の喜びとシャードンフロイデ」以外は中点を上回り、最も平均点が高かったのは、「自分との相違への嫌悪」で、続いて「傲慢な言動への嫌悪」であった。アンチファン行動尺度の下位尺度においては、「拒否的アンチファン行動」のみが中点を上回った。

また、「どのくらいアンチファン対象が嫌いか」という単一項目の嫌悪度評定について、アンチファン態度尺度・アンチファン行動尺度の各因子との相関分析を行った結果、アンチファン態度のすべての因子、および、アンチファン行動の「拒否的アンチファン行動」と「オフライン批評」との間に.20以上の有意な相関が得られた（Table 5）。特に、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「嫌悪共有の喜びとシャードンフロイデ」、「非常識さへの嫌悪」、「拒否的アンチファン行動」とは比較的強い相関（ $r > .40$ ）が認められた（相関の強度に関する言語的表現については、吉田、

Table 5 アンチファン態度・アンチファン行動尺度の各因子の基本統計量と嫌悪度・期間との相関

変数名	N	M	SD	Min	Max	嫌悪度	嫌悪期間
アンチファン態度							
F1傲慢な言動への嫌悪	741	4.139	1.235	1.000	6.000	.347**	.075*
F2作品の質と能力の低さへの嫌悪	743	3.889	1.103	1.000	6.000	.507**	.092*
F3非常識さへの嫌悪	744	3.928	1.302	1.000	6.000	.405**	.017
F4嫌悪共有の喜びとシャードンフロイデ	742	2.625	1.115	1.000	6.000	.426**	.132**
F5自分との相違への嫌悪	742	4.773	0.930	1.000	6.000	.336**	.100**
F6外見への嫌悪	736	3.786	1.315	1.000	6.000	.376**	.110**
F7信頼性欠如への嫌悪	740	3.555	1.250	1.000	6.000	.326**	.039
アンチファン行動							
F1攻撃的アンチファン行動	740	1.224	0.522	1.000	5.111	.101**	-.001
F2オンライン批評	744	1.500	0.926	1.000	6.000	.131**	.027
F3拒否的アンチファン行動	744	3.838	1.102	1.000	6.000	.435**	.114**
F4オフライン批評	744	2.986	1.577	1.000	6.000	.316**	.100**

1998参照)。同様に、アンチファン対象を嫌いな期間とアンチファン態度尺度・アンチファン行動尺度の各因子の相関係数を算出した結果、.20以上の有意な相関は認められなかった。

加えて、この嫌悪度評定は、アンチファン態度を総合したものであるという考えに基づいて、アンチファン態度尺度の各7因子の尺度得点を説明変数にし、嫌悪度を目的変数として重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、重決定係数は有意となり ($R^2=.326$, $R_{adj}^2=.320$, $F_{(7, 709)}=49.086$, $p<.001$)、標準偏回帰係数は、有意なもので絶対値が大きいものから順に、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」($\beta=.260^{**}$)、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」($\beta=.149^{**}$)、「外見への嫌悪」($\beta=.075^*$)となり、「傲慢な言動への嫌悪」($\beta=.070^{\dagger}$)と「信頼性欠如への嫌悪」($\beta=.066^{\dagger}$)は有意傾向を示した。

3.5 アンチファン態度とアンチファン行動の関連性

アンチファン態度尺度、および、アンチファン行動尺度の各下位因子の尺度得点の相関係数を算出した (Table 6)。「攻撃的アンチファン行動」は、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」と弱い相関が認められた。「オンライン批評」は、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」と比較的強い相関、そして、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「非常識さへの嫌悪」、「信頼性欠如への嫌悪」と弱い相関が認められた。「拒否的アンチファン行動」は、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」と強い相関、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」と比較的強い相関、そして、「外見への嫌悪」、「自分との相違への嫌悪」、「非常識さへの嫌悪」、「傲慢な言動への嫌悪」と弱い相関が認められた。最後に、「オフライン批評」では、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」と比較的強い相関、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「非常識さへの嫌悪」、「外見への嫌悪」、「信頼性欠如への嫌悪」と弱い相関が認められた。

Table 6 アンチファン態度・アンチファン行動尺度の各因子の相関分析

アンチファン態度	アンチファン行動			
	F1	F2	F3	F4
	攻撃的 ファン 行動	オン ライ ン 批 評	拒 否 的 ファン 行 動	オ フ ラ イ ン 批 評
F1傲慢な言動への嫌悪	.074*	.145**	.288**	.180**
F2作品の質と能力の低さへの嫌悪	.140**	.210**	.702**	.358**
F3非常識さへの嫌悪	.133**	.216**	.333**	.244**
F4嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ	.361**	.514**	.461**	.449**
F5自分との相違への嫌悪	-.059	.023	.384**	.157**
F6外見への嫌悪	.144**	.149**	.389**	.243**
F7信頼性欠如への嫌悪	.197**	.236**	.139**	.209**

** $p<.01$, * $p<.05$

アンチファン態度がアンチファン行動にどのように影響しているのかを明らかにするために、アンチファン態度尺度の各7因子の尺度得点を説明変数にし、アンチファン行動尺度の4因子それぞれを目的変数として重回帰分析（強制投入法）を行った (Table 7)。

その結果、「攻撃的アンチファン行動」($R^2=.175$, 修正 $R^2=.167$, $F_{(7, 701)}=21.281$, $p<.001$)に

において、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」($\beta=.361$)との関連が最も大きく、「非常識さへの嫌悪」($\beta=.113$)と「信頼性欠如への嫌悪」($\beta=.103$)とも正の関連が認められたが、「自分との相違への嫌悪」($\beta=-.217$)とは負の関連が認められた。すなわち、アンチファン対象への嫌悪を共有しながら不幸を喜ぶ傾向が強く、自分との違いによる嫌悪傾向が弱く、非常識さへの嫌悪傾向が強く、信頼性への欠如による嫌悪傾向が強いほど、アンチファン対象やそのファンに対する攻撃的な迷惑行為を行いやすいことがわかった。

次に、「オンライン批評」($R^2=.304$, 修正 $R^2=.297$, $F_{(7, 701)}=43.638$, $p<.001$)において、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」($\beta=.556$)との関連が最も大きく、「非常識さへの嫌悪」($\beta=.147$)と正の関連が認められたが、「自分との相違への嫌悪」($\beta=-.142$)と「作品の質と能力の低さへの嫌悪」($\beta=-.097$)とは負の関連が認められた。つまり、アンチファン対象への嫌悪を共有しながら不幸を喜ぶ傾向が強く、非常識さへの嫌悪傾向が強く、アンチファン対象と自分との違いによる嫌悪傾向、および、アンチファン対象の作品や能力のレベルの低さを酷評する傾向が低いほど、ソーシャルメディアにおけるアンチファン対象やそのファンに対する否定的な批評行動や情報の共有をしやすかった。

さらに、「拒否的アンチファン行動」($R^2=.532$, 修正 $R^2=.527$, $F_{(7, 701)}=113.679$, $p<.001$)において、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」($\beta=.630$)との関連が最も大きく、「自分との相違への嫌悪」($\beta=.178$)と「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」($\beta=.141$)とは正の関連が認められたが、「信頼性欠如への嫌悪」($\beta=-.166$)と負の関連が認められた。すなわち、アンチファン対象の作品や能力のレベルの低さを酷評する傾向が強く、アンチファン対象と自分との違いによる嫌悪傾向が強く、アンチファン対象への嫌悪を共有しながら不幸を喜ぶ傾向が強く、信頼性への欠如による嫌悪傾向が弱いほど、アンチファン対象の作品やパフォーマンスなどに対する拒否的な行動が起こりやすかった。

最後に、「オフライン批評」($R^2=.220$, 修正 $R^2=.213$, $F_{(7, 701)}=28.316$, $p<.001$)は、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」($\beta=.348$)との関連が最も大きく、「作品の質と能力の低さへ

Table 7 アンチファン態度の各因子とアンチファン行動の各因子との重回帰分析(強制投入法)

	アンチファン行動			
	F1	F2	F3	F4
	攻撃 的 ア ン チ 行 動	オ ン ラ イ ン バ ラ イ ン グ 行 動	拒 否 的 ア ン チ 行 動	オ フ ラ イ ン バ ラ イ ン グ 行 動
アンチファン態度				
F1傲慢な言動への嫌悪	-.032	-.032	.025	-.033
F2作品の質と能力の低さへの嫌悪	-.072	-.097*	.630**	.131**
F3非常識さへの嫌悪	.113*	.147**	-.053	.073
F4嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ	.361**	.556**	.141**	.348**
F5自分との相違への嫌悪	-.217**	-.142**	.178**	-.021
F6外見への嫌悪	.066	-.015	-.031	.030
F7信頼性欠如への嫌悪	.103*	.054	-.166**	.008
	R^2	.175**	.304**	.532**
	調整済み R^2	.167**	.297**	.527**

** $p<.01$, * $p<.05$ (値は標準偏回帰係数 (β))

の嫌悪」($\beta = .131$)と正の関連性が認められた。すなわち、アンチファン対象への嫌悪を共有しながら不幸を喜ぶ傾向、および、アンチファン対象の作品や能力のレベルの低さを酷評する傾向が強いほど、身近な他者とのアンチファン対象に対する批評行動が生じやすいことが明らかになった。

3.6 アンチファン態度による類型化と類型の特徴

(1) アンチファン態度によるクラスタ分析

アンチファン態度とアンチファン行動の関連性をさらに分析するために、アンチファン態度尺度の7下位尺度の尺度得点に対してWard法によるクラスタ分析を行った。3クラスタ解から6クラスタ解まで算出し、解釈可能性の観点から5クラスタ解を採用した(Figure 1)。アンチファン態度5クラスタ解の下位尺度得点を従属変数とする一元配置分散分析の結果をTable 8に示す。

全体的な嫌悪感情の程度で分類すると、クラスタ4と5は高い程度の嫌悪感情、クラスタ1とクラスタ2は中程度の嫌悪感情、クラスタ3は低い程度の嫌悪感情を抱く層であると考えられる。高程度の嫌悪感情を有するクラスタ4と5においても差異があり、クラスタ5はクラスタ4と比較して、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」がかなり低く、また、「傲慢な言動への嫌悪」、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「非常識さへの嫌悪」においてもクラスタ4とくらべて低いという特徴がある。したがって、上述した分析において「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」がアンチファン行動と強く関連していることが示されたことを踏まえて、本研究では便宜的に、クラスタ4を「高嫌悪高共有層」、クラスタ5を「高嫌悪低共有層」と命名した。同様に、中程度の嫌悪感情を有するクラスタ1と2においても差異があり、クラスタ2は、クラスタ1と比較して、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」、「外見への嫌悪」がかなり低いのに対して、クラスタ1は、クラスタ2と比較して、「非常識さへの嫌悪」と「自分との相違への嫌悪」が低いという特徴がある。したがって、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」の重要性を鑑み、クラスタ1を「中嫌悪中共有層」、クラスタ2を「中嫌悪低共有層」と命名した(4クラスタ解を選択した場合は、これらクラスタ1と2が結合して1つのクラスタを構成する)。最後に、クラスタ3は、有名人に対して嫌悪感情をあまり抱かない調査協力

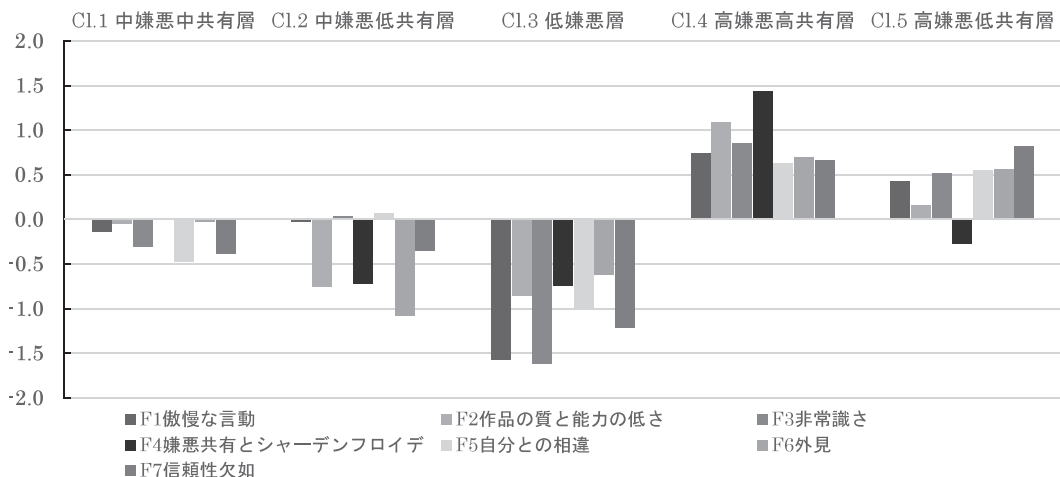


Figure 1 アンチファン態度 5 類型の特徴 (標準化得点)

Table 8 アンチファン態度5類型の比較

	Cl.1	Cl.2	Cl.3	Cl.4	Cl.5			
	中 嫌 悪 中 共 有 層	中 嫌 悪 低 共 有 層	低 嫌 悪 層	高 嫌 悪 高 共 有 層	高 嫌 悪 低 共 有 層			
アンチファン態度	(n=204)	(n=119)	(n=91)	(n=138)	(n=169)	F値 ⁽¹⁾	η_p^2	下位検定
F1傲慢な言動への嫌悪	3.97(0.96)	4.10(1.01)	2.19(0.88)	5.06(0.75)	4.66(0.87)	158.28***	.47	4>5>2>1>3
F2作品の質と能力の低さへの嫌悪	3.83(0.76)	3.04(0.78)	2.92(1.21)	5.08(0.75)	4.06(0.82)	130.02***	.42	4>5>1>2>3
F3非常識さへの嫌悪	3.53(0.90)	3.98(0.95)	1.84(0.84)	5.03(0.83)	4.61(0.79)	227.21***	.56	4>5>2>1>3
F4嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ	2.62(0.78)	1.81(0.56)	1.79(0.81)	4.21(0.85)	2.31(0.64)	233.56***	.57	4>1>5>2>3
F5自分との相違への嫌悪	4.34(0.73)	4.84(0.71)	3.85(1.11)	5.35(0.64)	5.28(0.62)	91.53***	.34	4=5>2>1>3
F6外見への嫌悪	3.75(0.87)	2.37(0.78)	2.96(1.31)	4.69(1.06)	4.51(1.03)	123.23***	.41	4=5>1>3>2
F7信頼性欠如への嫌悪	3.09(0.82)	3.12(1.08)	2.05(0.82)	4.38(0.99)	4.58(0.79)	171.26***	.49	5=4>2>1>3

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$ ⁽¹⁾ $F_{(4,716)}$ 下位検定はHolm法を使用

者群である可能性が高い層で、「自分との相違への嫌悪」は中点を上回っているものの、それ以外の下位尺度得点がかかなり低いという特徴を有しているため、「低嫌悪層」と命名した。

(2) アンチファン態度による類型と対象のジャンル

アンチファン態度による類型とアンチファン対象のジャンルの関連性を検討するために、「その他」の回答をまとめた上で、カイ二乗検定を行った結果 (Table 9)、度数の偏りが有意であった ($\chi^2_{(40)} = 143.541, p < .001, \text{Cramer's } V = .223$)。残差分析の結果、お笑いタレントにおいて、クラスタ5の度数が大きく、クラスタ1, 2, 3の度数が小さいことがわかった。タレントにおいて、クラスタ1と2の度数が大きく、クラスタ5が小さいことがわかった。俳優や女優、そして、スポーツ選手においては、クラスタ3の度数が大きく、クラスタ5が小さいことがわかった。ミュージシャンにおいて、クラスタ3の度数が大きいこと、また、アナウンサーにおいては、クラスタ2の度数が大きく、クラスタ5が小さいことがわかった。また、モデルにおいて、クラスタ2の度数が大きく、俳優や実業家などをまとめた「その他」においては、クラスタ4で度数が大きいことがわかった。最後に、ユーチューバー、アイドル、政治家においては、類型で有意な度数の偏りがみられなかった。

アンチファン態度の類型ごとに、アンチファン対象としてあげられた有名人 (全体で266名) を見てみると、嫌悪傾向の高いクラスタ4 ($n=138$) では、81人のアンチファン対象があげられており、「その他」に分類されるアンチファン対象が多くあげられていたことが示された。最も多くあげられた「安田大サーカス クロちゃん」でも13.8% (全体の2.6%)、続く「坂上忍」で8.7% (全体の1.6%) であり、様々なアンチファン対象の名前があげられていた。同様に、全体的に嫌悪感情が強いが、嫌悪共有を喜んだりする傾向が低い特徴があるクラスタ5 ($n=169$) では、57人のアンチファン対象があげられており、お笑いタレントが多く含まれる傾向にあり、タレント、俳優や女優、アナウンサー、スポーツ選手が少ない。具体的には、「安田大サーカス クロちゃん」が40.2% (全体の9.13%) と多くの割合を占め、「アンジャッシュ 渡部」の7.1% (全体の1.6%) が続いて多く言及された名前であった。アンチファン対象に対して中程度の嫌悪感情を抱く特徴があるクラスタ1 ($n=204$) では、118人のアンチファン対象があげられており、

タレントやアナウンサーが多く、お笑いタレントが少ない傾向が示されたが、具体的には、「坂上忍」の11.3%（全体の3.1%）、続いて「宮根誠司」の6.4%（全体の1.7%）が多くあげられていた名前であった。中程度の嫌悪感情で嫌悪共有やシャーデンフロイデ傾向が低い特徴を有するクラスタ2（ $n=119$ ）では、67人のアンチファン対象があげられており、タレントやモデルが多く、お笑いタレントが少ない傾向が示されたが、具体的には、「坂上忍」の11.8%（全体の1.9%）、続いて「宮根誠司」の6.7%（全体の1.1%）が多かった。クラスタ1とクラスタ2は多くの点で類似していたが、クラスタ1はその他のアナウンサーが多かったのに対して、クラスタ2ではモデルが多かった点で異なっていた。最後に、アンチファン対象に対する嫌悪感情が低い特徴を示すクラスタ3（ $n=91$ ）では、67人のアンチファン対象があげられており、俳優や女優、ミュージシャン、スポーツ選手が多く、お笑いタレントが少ない傾向が示されたが、具体的には、「土屋太鳳」が5.5%（全体の0.7%）、続いて「ゆりやんレトリィバァ」と「本田翼」の4.4%（全体の0.5%）と様々なアンチファン対象の名前があげられていた。

Table 9 アンチファン態度5類型とアンチファン対象のジャンル

	お笑いタレント	タレント	俳優（女優も含む）	ミュージシャン	ユーチューバー	アイドル	アナウンサー	モデル	政治家	スポーツ選手	その他	
C1.1 中嫌悪中共有層	▼48	△45	36	14	10	8	△15	4	9	6	9	204
C1.2 中嫌悪低共有層	▼24	△30	19	6	6	6	8	△8	3	4	5	119
C1.3 低嫌悪層	▼14	14	△22	△17	5	4	2	1	1	△7	4	91
C1.4 高嫌悪高共有層	44	18	19	6	10	8	6	4	6	5	△12	138
C1.5 高嫌悪低共有層	△98	▼20	▼7	6	6	9	▼3	7	5	▼1	7	169
合計	228	127	103	49	37	35	34	24	24	23	37	721

(3) アンチファン態度による類型と嫌悪度、嫌悪期間の比較

アンチファン対象5類型を独立変数、アンチファン対象に対する嫌悪度、および、嫌悪期間を従属変数として分散分析を行った（Table 10）。まず、嫌悪度について、有意差が認められたため（ $F_{(4, 712)}=50.837$, $\eta_p^2=.222$, $p<.001$ ）、多重比較（Holm法）を実施したところ、クラスタ4、クラスタ5、クラスタ1、クラスタ2、クラスタ3の順でそれぞれの平均値の間に有意差があることが示された。同様に、アンチファン対象の嫌悪期間について、同様の分析を行った結果、5類型の平均値に有意傾向があることがわかり（ $F_{(4, 712)}=2.237$, $\eta_p^2=.012$, $p=.063$ ）、多重比較を実施したところ、クラスタ4とクラスタ2の平均値に有意差が認められた。

(4) アンチファン態度による類型とアンチファン行動の比較

アンチファン対象による5類型におけるアンチファン行動の差異を検討するために、アンチファン行動尺度の4下位尺度の尺度得点を従属変数として、一元配置分散分析を実施した（Table 10）。

まず、「攻撃的アンチファン行動」については、分析結果に有意差が認められたため（ $F_{(4, 713)}=20.971$, $\eta_p^2=.105$, $p<.001$ ）、多重比較（Holm法）を実施したところ、クラスタ1よりもクラスタ4が、クラスタ5、3、2よりもクラスタ1の平均値が有意に大きいことがわかった。続いて、

Table 10 アンチファン態度5類型における嫌悪度・嫌悪期間およびアンチファン行動の比較

	Cl.1 中嫌悪 中共有層 (n=204)	Cl.2 中嫌悪低 低共有層 (n=119)	Cl.3 低嫌悪層 (n=91)	Cl.4 高嫌悪 高共有層 (n=138)	Cl.5 高嫌悪低 低共有層 (n=169)	F値	η_p^2	下位検定
嫌悪度	3.31(1.14)	3.03(1.26)	2.44(1.38)	4.40(0.92)	3.84(1.09)	⁽¹⁾ 50.84**	.22	4>5>1>2>3
嫌悪期間(月)	30.63(31.31)	26.35(28.05)	29.64(29.09)	38.59(44.18)	30.88(35.04)	⁽¹⁾ 2.24 [†]	.01	4>2
アンチファン行動								
F1 攻撃的アンチファン行動	1.26(0.49)	1.06(0.16)	1.06(0.20)	1.53(0.87)	1.12(0.30)	⁽²⁾ 20.97***	.11	4>1>5>3>2
F2 オンライン批評	1.54(0.54)	1.15(0.54)	1.17(0.52)	2.26(1.37)	1.27(0.57)	⁽³⁾ 40.02***	.18	4>1>5>3>2
F3 拒否的アンチファン行動	3.82(0.81)	3.24(1.05)	3.14(1.14)	4.75(0.88)	3.85(1.05)	⁽⁴⁾ 53.63***	.23	4>1>5>2>3
F4 オフライン批評	2.84(1.33)	2.59(1.59)	2.38(1.64)	4.07(1.58)	2.87(1.39)	⁽⁵⁾ 25.06***	.12	4>5>1>2>3

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, [†] $p<.10$ ⁽¹⁾ $F_{(4, 712)}$, ⁽²⁾ $F_{(4, 713)}$, ⁽³⁾ $F_{(4, 715)}$, ⁽⁴⁾ $F_{(4, 716)}$ 下位検定はHolm法を使用

「オンライン批評」に関しても有意差が認められたため、($F_{(4, 715)}=40.022$, $\eta_p^2=.183$, $p<.001$), 多重比較 (Holm法) を実施したところ、「攻撃的アンチファン行動」と同様に、クラスタ1よりもクラスタ4が、クラスタ5, 3, 2よりもクラスタ1の平均値が有意に大きいことがわかった。さらに、「拒否的アンチファン行動」についての分析においても有意差が認められたため ($F_{(4, 716)}=53.628$, $\eta_p^2=.231$, $p<.001$), 多重比較 (Holm法) を実施したところ、クラスタ4はクラスタ1および5より平均値が大きく、クラスタ1と5は、クラスタ2と3よりも平均値が有意に大きいことがわかった。最後に、「オンライン批評」についての分析でも、有意差が認められたため ($F_{(4, 715)}=25.055$, $\eta_p^2=.123$, $p<.001$), 多重比較 (Holm法) を実施したところ、クラスタ4がその他のクラスタよりも平均値が大きくことが明らかになった。

4. 考察

4.1 アンチファン対象とそのジャンル

2019年11月から2021年8月の間に実施された調査において「嫌いな有名人」として指名された266名のアンチファン対象に関するデータが分析された。そのカテゴリーとして最も多くあげられ、全体の約3割を占めたのが、「お笑いタレント」であった。お笑いタレントは、その仕事の特性上、必要とあらば、強い口調を用いてツッコんだり、何度もしつこく同じことを繰り返すギャグを用いたり、人と異なることや常識から外れていること、品がなく不潔で汚いと感じられるようなことを「芸」として笑ってもらわなければならない職業であろう。このような特徴は、アンチファン態度尺度の下位尺度としても抽出されており、お笑いタレントは、職務上、嫌われるような特徴を抱かれやすいため、名前が多く挙がったのではないかと考えられる。一方で、ファン心理に関する先行研究 (e.g., 小城, 2002; 向居他, 2016) において、ファン対象として最も多く挙げられたミュージシャンは、一般的には、アンチファン対象として挙がりにくいことが明らかになった。すなわち、ミュージシャンはというジャンルは、ファン対象になりやすく、アンチファン対象になりにくいという、いわば「正直者からの名声」(Colton, 1820) を獲得しやすい職業であると考えられる。

また、アンチファン対象として最も多かったジャンルである「お笑いタレント」のうち約4割が「安田大サーカス クロちゃん」を指名していた。本研究の最初の調査が実施された2019年11月から12月は、TBS系列で放送された「水曜日のダウンタウン」において、アイドルプロデュース企画が進行しており、その企画でクロちゃんによってなされた、人としての信頼性を欠くような言動（特に、女性関係において）が、ソーシャルメディアでも多く取り上げられたため、指名されたと推測される。また、2020年以降に実施された調査においても、最も多く名前が挙がったのが、クロちゃんだった。すべてのデータを分析した際、クラスタ5（高嫌悪低共有層）の4割をクロちゃんが占めていたことも特筆すべき点であろう。テレビを中心としたメディアへの露出も継続的にあり、仕事内容も大きな変化がないことから、長期間にわたって、根強い嫌悪感情を持たれる特徴を有していることが推察される。しかしながら、2020年以降では、クロちゃんが指名された回数は、2位の坂上忍とほぼ同数で、全体に占める割合も低下している。アンチファン対象へのなりやすさは、本人が有する特性のみならず、話題性や流行、メディアへの露出の程度にも依存する可能性が高いと考えられる。

メディアにおける話題性に影響されたのは、2020年以降の調査で初めて指名された「アンジャッシュ 渡部」（全体4位22票、2020年以降3位）や「東出昌大」（全体12位9票、2020年以降5位）であろう。前者については2020年6月、後者については2020年1月に不倫スキャンダルが各種メディアで報じられたことで、指名されたと推測される。渡部においては、お笑いタレントであることも指名が重なったことに影響したのかもしれない。また、東出昌大のスキャンダルで報道された相手の女優名は、本調査では挙がっていない。東出昌大も同様にメディアから遠ざかっていることから考えても、アンチファン対象として指名されるためには、もともとの知名度やその対象を想起させる手がかり（例えば、不倫相手や元妻のメディア出演やその後に関する注目されるような記事など）が必要なかもしれない。また、本調査の協力者の約8割が女性であり、男性の不貞行為に対する嫌悪や男性の不貞行為に伴う女性の苦しみへの共感がより強く結果に現れた可能性がある。高橋・黄・阿部（2018）において、有名人のゴシップに対する評価について検討された際に、異性の不倫に対して不寛容度が高いこと、また、不倫に対する嫌悪や怒りといった感情は女性の方が高いことが示されたことから、調査協力者の女性の割合が高い本研究において、不倫スキャンダルが報じられた男性有名人が多く指名された理由がうかがえる。

最後に、詳細にわたる結果は提示していないが、アンチファン対象の「スポーツ選手」（24名）のうち、半数の12名が読売ジャイアンツの選手（うち1例が球団名）であった。このことは、広沢・小城（2005）で示されたように、巨人以外のプロ野球11球団のファンの半分以上が巨人を嫌う傾向にあること、そして、調査対象者の約8割が広島県在住者であり、アンチ巨人傾向を強く示す広島カープファンが多く含まれていた可能性があることと関連していると考えられる。

4.2 アンチファン態度尺度

本研究の最も主要な目的は、アンチファン態度尺度、および、アンチファン行動尺度を作成し、多かれ少なかれ私たちに共通して存在するアンチファン心理を理解することであった。まず、アンチファン態度尺度は、アンチファン対象の傲慢で攻撃的な立ち居振る舞いを示す「傲慢な言動への嫌悪」、アンチファン対象の作品、パフォーマンス、能力の低さを酷評する「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、アンチファン対象の非常識さに対する評価である「非常識さへの嫌悪」、アンチファン対象に対する嫌悪感情を共有し、アンチファン対象が不幸になることを喜ぶことを示

す「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」、アンチファン対象と自分自身の価値観や考え方などが異なることを示す「自分との相違への嫌悪」、アンチファン対象の外見的特徴に対する嫌悪感情を示す「外見への嫌悪」、そして、アンチファン対象が、男女関係などにおいて信用できる人物ではないことを示す「信頼性欠如への嫌悪」の7因子で構成されていることが示された。

「傲慢な言動への嫌悪」は、齋藤（2003）の「相手の話し方による嫌悪」、「相手の主張過剰による嫌悪」、「相手の傲慢さによる嫌悪」と重なっており、豊田（1998）が示した「思いやりの有無」という次元と一部対応していると考えられる。また、「自分との相違への嫌悪」と「外見への嫌悪」は齋藤（2003）の対人的嫌悪尺度における各因子に対応するものである。その中で、「自分との相違への嫌悪」については、自己認知と好きな人物に対する認知が類似し、それらと嫌いな人物は別の認知がなされることが示されていることから解釈可能であろう（e.g., Fiedler, Warrington, & Blaisdell, 1952; 水野 1999）。そして、「信頼性欠如への嫌悪」は、Anderson（1968）が示した「正直－嘘つき」という次元に対応していると解釈できる。また、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」についてのみ、アンチファン対象のある特定の特徴や行動に対する嫌悪ではない項目群から構成されていた。この「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」には、強い嫌悪に関する項目も含まれていることから、まず、アンチファン対象の特徴や行動を評価した上で、総合的な嫌悪感情として形成されるような上位に位置する嫌悪を示すものなのかもしれない。全体的には、2019年度のデータのみで作成された尺度（向居，2020）とくらべると、28項目削減されたことや「非常識さへの嫌悪」が新たに見いだされたことといった相違点はあるものの、概ね類似する構造を示した。

アンチファン態度尺度の下位尺度における尺度得点の平均値は、「傲慢な言動への嫌悪」で最も高く（4.14点）、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」以外のすべてにおいて中点（3.5点）を上回ったことから、アンチファン対象が調査協力者によって、これらの下位尺度が指し示す特徴に該当すると判断されたと解釈できる。

また、アンチファン対象に対する総合的な嫌悪感情の評定と仮定される「どのくらいアンチファン対象が嫌いか」という単一項目の嫌悪度評定は、アンチファン態度尺度の各下位尺度得点と.20以上の有意な相関が認められ、重回帰分析の結果、特に、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」、「外見への嫌悪」などと強く関連しており、単純に「アンチファン対象を嫌いかどうか」と問われた際に、これらの尺度得点が大きく影響を与えている可能性が示唆された。

最後に、アンチファン対象への嫌悪期間とアンチファン態度尺度の各下位尺度得点とは、.20以上の相関が認められなかったことから、嫌悪期間が長くなるほど、アンチファン態度が強くなるといった関係性があまりないことが明らかになった。

4.3 アンチファン行動尺度

アンチファン行動尺度は、オンライン・オフラインに関わらず、アンチファン対象やそのファンに対する攻撃的な迷惑行動を示す「攻撃的アンチファン行動」、SNSのようなソーシャルメディアにおけるアンチファン対象やそのファンに対する否定的な批評行動や情報の共有に関する行動を示す「オンライン批評」、アンチファン対象の作品やパフォーマンス、アンチファン対象が関係する事物に対する拒否的な行動を示す「拒否的アンチファン行動」、リアルスペースにおける身近な他者とのアンチファン対象に対する批評行動に関する「オフライン批評」の4因子で構

成されていることが示された。向居 (2020) のアンチファン行動尺度 (18項目 2 因子構造を採用) との相違点は、その際に削除された項目に含まれていた「オフライン批評」に関する 2 項目が 1 つの因子として採用されたこと、そして、「攻撃的アンチファン行動」から「オンライン批評」が分離されたことである。これらの批評行動に関する因子は、ソーシャルメディアにおけるアンチファン行動が問題になっていること、また、オンライン批評行動の比較として、リアルスペースにおける身近な他者との批評行動、すなわち、オフライン批評が利用可能であることから、アンチファン行動の特徴やそれに関与する要因について検討する際に重要になるであろう。

アンチファン行動尺度の下位尺度における尺度得点の平均値は、「拒否的アンチファン行動」において最も高く (3.84点)、唯一中点を上回るものであった。社会問題となっている「攻撃的アンチファン行動」や「オンライン批評」は生起頻度が低い現象であること (双方とも平均値が 1 点台)、また、これら 2 つの尺度得点の間には比較的強い相関 ($r=.65$) があり、相互に関連している可能性があることが示唆された。

嫌悪度評定は、アンチファン行動尺度の「拒否的アンチファン行動」および「オフライン批評」と有意な .20以上の相関が認められた。このことから、単純に「アンチファン対象を嫌いかどうか」と問われた際の回答の強度が上昇するにつれて、拒否的なアンチファン行動やリアルスペースにおける身近な他者との批評行動を伴う可能性が示唆された。別のとらえ方をすれば、アンチファン対象を総合的に「とても嫌いである」と評価するからといって、必ずしも、攻撃的なアンチファン行動やオンラインにおけるアンチファン対象に対する批評が増えるとは限らないとも解釈できる。

最後に、アンチファン対象への嫌悪期間とアンチファン行動尺度の各下位尺度得点とは、.20以上の相関が認められなかったことから、嫌悪期間が長くなるほど、アンチファン行動が多くなるといった関係性があまりないことが明らかになった。

4.4 アンチファン態度とアンチファン行動の関連性

アンチファン態度がアンチファン行動にどのように影響しているのかを明らかにするために、アンチファン態度尺度の各 7 因子の尺度得点を説明変数にし、アンチファン行動尺度の 4 因子それぞれを目的変数として重回帰分析を行った。その結果、社会問題となっている、アンチファン対象やそのファンに対する攻撃的な迷惑行為である「攻撃的アンチファン行動」については、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」傾向が強く、「自分との相違への嫌悪」傾向が弱く、「非常識さへの嫌悪」傾向が強く、「信頼性欠如への嫌悪」傾向が強いほど生起しやすいことが明らかになった。同様に、社会問題となっている、ソーシャルメディアにおけるアンチファン対象やそのファンに対する否定的な批評行動や情報の共有に関する行動である「オンライン批評」については、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」傾向が強く、「非常識さへの嫌悪」傾向が強く、「自分との相違による嫌悪」傾向、および、「作品の質と能力低さへの嫌悪」傾向が低いほど、生起しやすいことがわかった。両者に共通する点は、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」が最も強くそれぞれの行動に影響していることであろう。アンチファン対象に対する嫌悪感情を他者と共有することに喜びを感じ、そして、アンチファン対象が不幸になることに喜びを感じるのであるから、このことが、アンチファン対象やそのファンに対して、オンライン・オフラインに関わらず、攻撃的な迷惑行動を誘発するのは当然であろう。加えて、「非常識さへの嫌悪」もこれらの行動を誘発する可能性が示唆された。非常識な人間は、例えば、互恵関係を築き得な

いと判断されたり、自ら所属する集団の社会的・文化的規範から逸脱すると判断されるため、何らかの形で攻撃されたり、悪評が広められても妥当であると感じられているのかもしれない。そして、「攻撃的アンチファン行動」にのみ影響を与えた「信頼性欠如への嫌悪」についても、同様に、このような特徴を持つ人物は攻撃されて当然であると感じられているのかもしれない。また、負の影響がみられた「自分との相違への嫌悪」だが、これが高まることによってこれら問題行動とされるアンチファン行動が抑制されると考えるよりはむしろ、最も尺度得点の平均値が高かったこの因子の独自成分がより一般的な嫌悪感情を示しているため、あまり生起しないこのようなアンチファン行動に対して負の影響を示す結果となったと解釈できるだろう（「作品の質と能力の低さへの嫌悪」の負の影響も同様に解釈できる）。

「拒否的アンチファン行動」については、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」傾向が強く、「自分との相違への嫌悪」傾向と「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」傾向が強く、「信頼性欠如による嫌悪」傾向が弱いほど、生起しやすいことが明らかになった。最も影響が強いと考えられる「作品の質と能力の低さへの嫌悪」は、アンチファン対象の作品や能力のレベルの低さに嫌悪感情があるということなので、もしそうであれば、その対象の作品やパフォーマンスに接する機会を減らすという当然の行動選択だと解釈できる。しかしながら、同時に「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」がこのような拒否的行動に影響を与えていたことは、非常に興味深い。なぜなら、アンチファン対象に関する情報を拒否すると、アンチファン対象の不幸を喜んだりできないからである。しかし、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」を強烈な嫌悪感情の表れだととらえると解釈がしやすいのかもしれない。また、「拒否的アンチファン行動」に負の影響が示された「信頼性欠如への嫌悪」についてだが、「攻撃的アンチファン行動」へ正の影響が示されていたこと、そして、これら二つのアンチファン行動がほぼ無相関であることを考えると、このような特徴を持つ人物は拒否されるよりはむしろ、攻撃されるのが妥当であると感じられているのかもしれない。

最後に、「オフライン批評」については、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」傾向が強く、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」傾向が強いほど、生起しやすいことが明らかになった。アンチファン対象に対するリアルスペースにおける身近な他者との批評行動にもやはり、嫌悪感情を共有したいとする欲求が関連しており、また、それは主にアンチファン対象の作品や能力のレベルの低さに関する批評であると推察される。

まとめると、アンチファン態度の影響はそれぞれのアンチファン行動により異なる特徴が示されたものの、すべてのアンチファン行動に影響していたのは、アンチファン対象のある特定の特徴や行動に対する嫌悪ではなく、アンチファン対象への嫌悪を共有しながら、アンチファン対象の不幸を喜ぶ傾向である「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」であることが明らかになった。この「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」には強い嫌悪感情が含まれていると考えられており（向居，2020）、アンチファン対象の行動上の特徴の認知に起因するその他の嫌悪が生じることにより、高まる可能性があると考えられる。

4.5 アンチファン態度による類型化と類型の特徴

アンチファン態度とアンチファン行動の関連性をさらに分析するために、アンチファン態度による類型化を試みた。その結果、5類型に分類され、アンチファン態度とアンチファン行動の重回帰分析より、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」がアンチファン行動を説明するために

重要な要因であることが示されたことから、嫌悪度評価が高い順に、「高嫌悪高共有層」(クラスタ4)、「高嫌悪低共有層」(クラスタ5)、「中嫌悪中共有層」(クラスタ1)、「中嫌悪低共有層」(クラスタ2)、「低嫌悪層」(クラスタ3)と命名された。

まず、「高嫌悪高共有層」(クラスタ4)は、アンチファン態度のすべての下位尺度において評定が中点(3.5点)を超えており、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」の平均値の高さが特徴的であり、そして、「傲慢な言動への嫌悪」、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「非常識さへの嫌悪」も最も高く、「自分との相違への嫌悪」、「外見への嫌悪」、「信頼性欠如への嫌悪」は「高嫌悪低共有層」(クラスタ5)と同等に高いことが特徴である。アンチファン対象のジャンルでは、「その他」が多くあげられており、総合的な嫌悪度評定も高く、嫌悪期間も長く、調査協力者が、かねてよりずっと嫌っていた特定の有名人が指名されていると考えられる。続いて、全体的な嫌悪度が高いが、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」がやや低め(クラスタ2よりも高いがクラスタ1よりも低い)の「高嫌悪低共有層」(クラスタ5)は、「傲慢な言動への嫌悪」、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「非常識さへの嫌悪」において、「高嫌悪高共有層」(クラスタ4)よりは低いものの、それ以外の3つの層よりも高く、「自分との相違への嫌悪」、「外見への嫌悪」、「信頼性欠如への嫌悪」においては、クラスタ4と同等の平均値を示すアンチファン層である。「お笑いタレント」が多く含まれており、クロちゃんが約4割を占めていた。中程度の嫌悪度を示し、かつ、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」が中程度(クラスタ5よりも高いがクラスタ4よりも低い)の「中嫌悪中共有層」(クラスタ1)は、「中嫌悪低共有層」(クラスタ2)と比較して、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」と「外見への嫌悪」が高いのに対して、「非常識さへの嫌悪」と「自分との相違への嫌悪」が低いという特徴があり、タレントやアナウンサーが多く、お笑いタレントが少ないという傾向が示されている。人数が最も多いことから、平均的なアンチファン層であると仮定してもよいだろう。同様に、中程度の嫌悪度を示し、かつ、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」が低い(クラスタ3と同程度)の「中嫌悪中共有層」(クラスタ2)は、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」と「外見への嫌悪」が全体的に低いという特徴を有し、タレントやモデルが多く、お笑いタレントが少ない傾向が示されている。このアンチファン層は、アンチファン対象の外見やパフォーマンスではなく、傲慢な言動、非常識さ、自分との相違に対して中程度の嫌悪感を抱いているアンチファン層だと考えられる。そして、最後に、「低嫌悪層」(クラスタ3)は、有名人に対して嫌悪感情をあまり抱かない層で、「自分との相違への嫌悪」は中点を上回っているものの、それ以外の下位尺度得点がかかなり低いという特徴を有している。お笑いタレントが少なく、俳優(女優)や、ミュージシャン、スポーツ選手などが多い傾向にあり、強いて嫌いな有名人を指名して回答した調査協力者も含まれていると考えられる。また、本研究においては、最も嫌いな有名人についての評定を求めたため、嫌悪感情は低いけれども作品に対する批判をする「スナーク(snark)」ファン(e.g., Gray, 2005; Harman & Jones, 2013)から構成される類型は確認されなかったと推測される。

これらの5類型についてアンチファン行動の各下位尺度得点の平均値を比較してみると、「攻撃的アンチファン行動」、および、「オンライン批評」については、「高嫌悪高共有層」が最も高く、次いで、「中嫌悪中共有層」となり、残りの「高嫌悪低共有層」、「低嫌悪層」、「中嫌悪低共有層」には差異がみられなかった。「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」を除く、全般的なアンチファン態度は、「高嫌悪低共有層」の方が「中嫌悪中共有層」よりも高いことを勘案すると、「攻撃的アンチファン行動」や「オンライン批評」には、重回帰分析によって示された結果と同様に、

「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」が重要な役割を果たしており、いずれのアンチファン層においてもほとんど生起しないことが明らかになった。また、「拒否的アンチファン行動」については、「高嫌悪高共有層」が最も高く、次いで、「中嫌悪中共有層」と「高嫌悪低共有層」が同等で、その下に「低嫌悪層」と「中嫌悪低共有層」が続くという結果となった。「拒否的アンチファン行動」には、重回帰分析結果も考慮すると、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、および、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」が重要な役割を果たしていると考えられる。最後に、「オフライン批評」については、「高嫌悪高共有層」がそれ以外の層よりも平均点が高いこと、また、「拒否的アンチファン行動」に次いで全体的な得点が高いことがわかった。重回帰分析結果を合わせて考えると、「オフライン批評」は、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」と「作品の質と能力の低さへの嫌悪」に支えられていながらも、「高嫌悪高共有層」以外のいずれの層においても多くはないにしろ生起すると考えることができるだろう。

まとめると、アンチファン態度による5類型の中でも、「高嫌悪高共有層」では、おそらくこれまでずっと嫌いであったアンチファン対象が対象となっており、いずれのアンチファン行動も、他の4つの類型にくらべて、最も頻繁に生起することが明らかになった。また、アンチファン行動の生起には、重回帰分析の結果と同様に、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」が重要な役割を果たしていることが示唆された。

4.6 本研究の課題と今後の展望

本研究の課題として、調査協力者の性別や年齢に関するサンプリングの問題が指摘される。まず、本研究の調査協力者における女性の占める割合は約8割に達しており、女性から嫌われている有名人が多く指名される結果となった。豊田(1998)において、異性から嫌われる特性は男性と女性で大きな差異があることが示されたことから、対人嫌悪感情には性差があると考えられる(cf. 河野・羽成・伊藤, 2015)。したがって、アンチファン心理においても同様に性差があると仮定してもおかしくはない。アンチファン態度尺度やアンチファン行動尺度の一般化可能性を高めるには、調査協力者数における性別の偏りを少なくするためのサンプリングにおける工夫が求められるだろう。また、本研究における調査協力者は大学生が大半を占めており、年齢層にも偏りがあった。アンチファン心理は、ファン心理同様、性別や年齢を超えてある程度普遍的に共通するものと仮定されているが、発達による変化がある可能性も想定される。例えば、アンチファン心理に密接に関連すると考えられる「怒り」のようなネガティブな情動は加齢に伴い減少するとされるものの(e.g., Schieman, 1999)、高齢者は若齢者よりもより強い怒りを生じさせる可能性を指摘した研究も存在する(中田・久保(川合)・岡ノ谷・川合, 2018)。異なった年齢層からなる幅広いサンプルから得られたデータは、アンチファン態度尺度、および、アンチファン行動尺度の一般化可能性を高め、アンチファン心理をより適切に理解するための尺度項目の改善につながるであろう。

本研究で作成されたアンチファン態度尺度は、予備的に作成された尺度(向居, 2020)よりも下位尺度数が1つ増加したにもかかわらず、内容が類似している項目や意味が曖昧な項目が削除されることによって、全体の項目数が減少した。しかしながら、いまだに類似した項目が多く含まれる印象がぬぐえないため、各下位尺度に関してより重要で中心的な質問項目を厳選することで、測定精度を低下させずに各尺度を短縮する必要があると考えられる。加えて、斎藤(2003)のような対人嫌悪感情に関する先行研究から想定される因子、例えば、アンチファン対象への妬

みによる嫌悪、アンチファン対象の自己中心性による嫌悪、自分との類似による嫌悪に関する因子が、本研究の因子分析においては抽出されなかった。したがって、アンチファン態度尺度は、それぞれの下位尺度の中心的な項目のみを選択することで項目数を減少させながら、尺度の内容的妥当性を高めるために十分に改善の余地があると考えられる。また、アンチファン行動尺度については、先述したように、2項目から構成される因子（オフライン批評）が含まれていることが問題とされる。それ以外の下位尺度では、類似した内容の項目を削除するなどしながら、使用する項目を厳選する必要があるだろう。最後に、アンチファン態度尺度、アンチファン行動尺度双方において、床効果を示す質問項目がある程度含まれていたことから、質問方法を変更することによって、回答パターンをより正規分布に近くする工夫が必要であると考えられる。まとめると、今後の研究において、適切なサンプリング方法を用いながら、アンチファン態度・行動両尺度の質問項目や構成を整備することで、両尺度の短縮版を作成することが今後の重要な課題になるといえるだろう。

本研究は、ソーシャルメディアにおける有名人に対する悪質なコメントなど、アンチファンによる過激な行動が社会問題となっていることを背景として、アンチファン態度尺度、および、アンチファン行動尺度を作成し、誰しもの心に一般的に存在するアンチファン心理を明らかにすることを目的とした。その結果、アンチファン態度尺度は、「傲慢な言動への嫌悪」、「作品の質と能力の低さへの嫌悪」、「非常識さへの嫌悪」、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」、「自分との相違への嫌悪」、「外見への嫌悪」、「信頼性欠如への嫌悪」の7下位尺度で構成されることが示された。また、アンチファン行動尺度は、「攻撃的アンチファン行動」、「拒否的アンチファン行動」、「オンライン批評」、「オフライン批評」の4下位尺度で構成されることがわかった。特に社会問題との関係が深い「攻撃的アンチファン行動」や「オンライン批評」は、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」の影響を強く受け、そして、「非常識さへの嫌悪」もまた少なからずそれらに影響することが明らかになった。さらに、調査協力者をアンチファン態度によって類型化することで、アンチファン対象のジャンルやアンチファン行動との関連性を検討した結果、全体的に強い嫌悪を示し、それを共有することに喜びを感じるアンチファン層（高嫌悪高共有層）は、概して、アンチファン行動傾向が高いこと、また、中程度の嫌悪を示す2つのタイプの比較でも、社会問題となるアンチファン行動が多くなるのは、アンチファン対象への嫌悪感情を共有し、アンチファン対象の不幸を喜ぶ傾向がより高い層（中嫌悪中共有層）であることも明らかになった。

上述したように、本研究では、「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」、すなわち、アンチファン対象への嫌悪を共有しながら、アンチファン対象の不幸を喜ぶ傾向が、アンチファン行動に大きな影響をもたらすことが示された。したがって、社会問題となっているアンチファン行動を理解し、有効な対策を講じるためには、この「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」が、どのような要因によってもたらされるのかを検討することもまた、今後の重要な課題となるだろう。向居（2021）は、2019年度に収集されたデータのみを用いてアンチファン態度・行動尺度を作成し、アンチファン心理と仮想的有能感やDark Tetradなどのようなパーソナリティ特性との関連を検討した。その結果、作成されたアンチファン態度・行動尺度の構成は若干異なるものの、本研究の「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」に対応する「シャーデンフロイデと妬みと強い嫌悪」には、サイコパシー傾向、仮想的有能感、そして、拒否回避欲求の高さが影響していることが示された。その他にも、向居（2021）では、攻撃的アンチファン行動（本研究で見いだされた「攻撃的アンチファン行動」と「オンライン批評」を合わせたもの）には、自尊感情の低さ、直接的

サディズムと自己愛傾向の高さやSNS投稿回数の多さが影響していることなどもまた示された。今後は、本研究において新しく作成された尺度を用いて、パーソナリティ特性のような個人差要因や社会経済的要因など、どのような要因がどのように「嫌悪共有の喜びとシャーデンフロイデ」、そして、「攻撃的アンチファン行動」や「オンライン批評」に影響を及ぼすのかについて検討することが必要となるだろう。

アンチファン対象となる特定の個人に対するアンチファン心理を概観すると、本研究では詳細にわたる分析は実施されていないものの、もともと一面的な嫌悪感情、例えば、スキャンダル報道による「信頼性欠如への嫌悪」だったものから派生して、作品の質やその人自身の能力への嫌悪に結び付き、時には嫌悪を共有して喜んだり、シャーデンフロイデが生じる結果になるといった現象があるようにも読み取れる。客観的に考えると、本人のパフォーマンス自体はスキャンダルには影響されるべきものではないのだが、その影響を受けてしまい、パフォーマンス自体の評価も低下するといった現象が生じているのかもしれない。すなわち、あるネガティブな評価を下したことに對する印象に従って、他の特性にも問題があるだろうと評価してしまうハロー効果（Halo effect: Thorndike, 1920）と考えられる認知バイアスが生じている可能性もあるだろう。このようなアンチファン心理における「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」という状態は、ファン心理における「あばたもえくぼ」という状態と関連しており、両者とも、対人的好悪感情と対人認知を関連づける傾向を示していると仮定される（水野, 1999）。したがって、対人魅力研究や対人嫌悪研究と比較しながら、ファン心理に関わる認知バイアスについての検討することも興味深いと思われる（ファン心理におけるスキャンダルの影響に関する研究は、小城・薊・小野, 2010を参照）。

ICTが進展した現代社会において大きな問題となっているアンチファン行動を助長している社会的要因は何かを考えることもまた重要な課題となる。例えば、インターネット上は、大手マスメディアを情報源とするものも含めて、有名人のスキャンダルやゴシップに関する煽情的な見出しのニュース記事で溢れている（オンラインニュースと煽情主義については、Kilgo, Harlow, García-Perdomo, & Salaverria, 2018参照のこと）。その中には、有名人の発言の一部が切り取られ、本来意図したものと異なった意図があるように伝えるような記事や、真偽を確かめずに作成されたような（そして、そのことすら自認しているような）記事、また、有名人のプライバシーを侵害するような記事なども多数あり、結果的に（時に、意図的に）、有名人の名誉棄損や信用失墜をもたらす誹謗中傷が含まれる情報が日々垂れ流されている。そのような煽情的な記事の見出しは、メディアが広告収入を得るために、私たちにひきつけ、それを「クリック」させるために存在する。そして、その誘いに乗ってしまうと、利用者の過去のインターネット利用状況を反映するアルゴリズムによって、ポータルサイトやニュースサイトを利用するたびに、類似した記事が、否応なしに私たちの目に優先的に触れる仕組みになっている。さらに、1990年代半ばまでのオフラインにおけるコミュニティ中心の社会（総務省, 2019）と最も大きく異なる点は、私たち個人が、ソーシャルメディアを通じて、情報の発信源になることが可能となったことである。記事内容の真偽に関わらず、有名人のスキャンダル記事をSNSで共有したり、そのような記事が掲載されたニュースサイトのコメント欄に意見を書き込んだり、はたまた、話題になっている有名人のSNSに直接コメントしたり、メッセージを送ることさえも可能になった。ある煽情的な記事に対するインターネットユーザーの反応は、時に「ネット炎上」を引き起こし、さらなる煽情的な記事を生み出す一因となって、あたかもそれが重大な出来事であるかのようにさらに多

くのメディアで扱われることになる。このようなICTが進展した社会が、アンチファン心理にまつわる社会問題の下支えになっていることはいうまでもない。そして、上述したような、煽情的なニュースを発信するメディアは、私たちが有名人のスキャンダルやゴシップに感情的にひきつけ、情報の受け手にしているだけではなく、そのような情報の送り手としてのロールモデルの役割も果たしていると考えられる。つまり、名の知れた大手メディアが真偽不明のスキャンダルやプライバシーを侵害するようなゴシップを煽情的に発信することは、一般の人々に「同程度の内容を自由に発信してもかまわないということ」を学習させる役割を果たしている可能性があるのだ。

“芸能人が嘘をつくと怒られるのに週刊誌が嘘をつくと怒られないのはなぜですか？
臆測を元に面識のある女優さん、タレントさんに絡めた数々の悪意ある記事。事実無根だと言っても強行突破で発売され、その後の追い記事にもかなり目に余るものがあります。どうしてこんなに信憑性のない、嘘にまみれた言葉で傷つけられなくてはならないんだろう。(以下略)”

—水川あさみ

上の文章は、俳優の水川あさみが、ある週刊誌のゴシップ記事に対して、2021年10月27日に自身のインスタグラムで記した声明であるとされる（水川，2021）。そもそもは、マスメディアが「表現の自由」を盾にして、営利目的で、有名人のプライバシーを侵害し、虚偽の情報も含まれるような煽情的なゴシップを報道していることを忘れてはならない。このように、多くの場合において、情報を収集し、発信することを職務とする各種メディアが誹謗中傷の先導役を果たし、インターネットユーザーがSNSなどでその情報を再発信したり、共有したり、そのニュースにコメントすることで、メディアに追従し、誹謗中傷を増幅させるという仕組みが成立している。Yahoo!ニュースのコメントポリシー（Yahoo! JAPAN, 2021b）において、Yahoo!ニュースのコメント欄における「過度な批判や誹謗中傷」が規制されているのは、冒頭で示したとおりであるが（Table 1参照）、同ページでは、「法令違反」の1つとして「プライバシーの侵害に当たる投稿」もまた規制されている。そして、「表現の自由」は無制限ではありません」と明記し、ニュースへのコメントの掲載や投稿を制限している（Yahoo! JAPAN, 2021b）。一般市民も同様だが、果たしてすべてのメディアによって報じられている記事は「良質な情報発信」（Yahoo! JAPAN, 2021a）に値するもので、そして、それらすべての記事が、Yahoo!ニュースのコメントポリシーに記載されているような事項が順守されているといえるものなのだろうか。もしそうでないのならば、一般人によるコメント同様に、違反している記事も削除対象にする必要はないのだろうか。

しかしながら、先述したように、誹謗中傷については批判との明確な区別は困難であり、基本的に「表現の自由」は侵害されるべきものではないのも事実である。少なくとも私たち一般市民ができるのは、情報の真偽を見極め、たとえ、記事の主題になっている人物に対して強い嫌悪感情を抱いていたとしても、誹謗中傷の連鎖に加担しないことぐらいしかないのかもしれない。総務省（2021）は、インターネット上の誹謗中傷について、「正義感から行った」などという正当化も存在するが、立場や事実かどうかを問わず、人格を否定または攻撃するような投稿は「正義」にはなり得ず、「目立つ存在だから仕方がない」といった主張は通用しないと述べている。笹川・

和泉 (2013) は、インターネットにおける誹謗中傷問題に関して、誹謗中傷を含んだ情報が個人で完結せず、不特定多数への拡散の可能性を持っている側面があることに言及し、その原因として、インターネットではリアルスペースとは異なり誰もが広く情報を発信できること、そして、インターネットにおける情報の性質が、リアルスペースにくらべて、より残りやすく、共有されやすくなっているからであると指摘した (野上, 2016もあわせて参照)。どのような場所 (リアルスペースやサイバースペース) であろうと、どのような立場 (マスメディアや個人) であろうと、情報を発信したり、共有したりすることには大きな責任が伴う。もちろん、水川あさみ本人がマスメディアの過剰な報道に対して声を上げることができたのも個人の公式ソーシャルメディアを利用したからであるし、筆者がこの情報を入手できたのも、インターネット上で様々なメディアがこぞって報道したからであり、誰もがみな、多かれ少なかれインターネットにおけるメディアの恩恵を享受しているのも事実である。これまでずっと有名人は、良くも悪くもメディアに取り上げられることで一定のパブリシティ効果を得ていたであろうし、インターネット上のコミュニケーションの特徴を利用して「炎上商法」というネガティブな反応を集めることで、個人の利益を得ようとする者も存在するのが現状である。だからといって、各種メディアや個人による誹謗中傷やプライバシー侵害は決して許されるものではない。情報を発信・共有する際に、週刊誌も私たちも意図的に「嘘をついてはいけない」し、どんな人も「嘘にまみれた言葉で傷つけられ」てはいけない。ICTが進んだ現代社会において、私たち一人一人が、インターネットやソーシャルメディアにおけるコミュニケーションの特性を十分に理解し、論理的で内省的な批判的思考に基づいたメディアリテラシーを身に着けたうえで、効果的にコミュニケーションを行う必要があるとともに、特に学校教育現場において、情報モラル教育 (文部科学省, 2020) の充実を図り、あわせて、他者の気持ちの理解や自己の感情の統制などに係る心理教育プログラム (松尾, 2002参照) を推進する必要があると考えられる。

今や、本論冒頭で紹介したように、機械学習をはじめとしたAI技術によって誹謗中傷の取り締まりさえも自動的に行われるような時代になった。最近、Huszár, Ktena, O'Brien, Belli, Schlaikjer, & Hardt (2022) は、Twitterのタイムラインを表示するアルゴリズムが政治的右派 (保守派) からのツイートに左派 (リベラル派) からのツイートより増幅して「おすすめ」表示させることを明らかにした。その一因について、Brown, Nagler, & Tucker (2021) は、アメリカ連邦議会議員のツイートを分析した結果、人々のツイートに対する主にネガティブな関与が影響したのではないかと主張した (詳細な研究方法は、Brown, 2021参照)。ネガティブ反応が生じやすいのが政治的右派のツイートであり、Twitterのアルゴリズムが、そのネガティブな反応を人々の積極的な関与としてとらえるように作成されていたことによって生じた現象ではないかという解釈である。もし彼女らの結論が妥当ならば、意見を共にしない政治家の投稿にネガティブな意見を付け加えて投稿するTwitterユーザーは、罵ったり、貶めたりしているつもりなのだろうが、実際は、その政治家を「推す」ことになっているかもしれないのだ。つまり、Twitterのアルゴリズムによる右派推しバイアスは、皮肉にも、熱心な「アンチ」によって支えられていたということに他ならない (平, 2021もあわせて参照)。ICTやAI技術が進化した現代社会において、コミュニケーションの方法が大きく変化したにも関わらず、約200年前にコルトン (Colton, 1820) が述べたように、「アンチ」の言葉 (そのすべてが「ならず者」によるものや誹謗中傷でないにしろ) が「名声」を獲得する一つ的手段となっていることは今も変わらないようである。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- Anderson, N. H. (1968). Likableness ratings of 555 personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 272-279.
- 朝日新聞デジタル (2021). 眞子さま, 「複雑性PTSD」と診断 宮内庁が発表
<https://www.asahi.com/articles/ASPBI5FXZPB1UTIL02F.html> (参照日2021年11月1日)
- Brown, M. A. (2021). Methods Supplement for “Twitter found conservative politicians receive disproportionate amplification via its algorithmic timeline. Here’s one possible explanation why” https://github.com/SMAPPNYU/moc_ratios/blob/main/methods_supplement/Methods_Supplement_TMC_MoC_Ratios.pdf (参照日2021年11月1日)
- Brown, M. A., Nagler, J., & Tucker, J. (2021). Twitter amplifies conservative politicians. Is it because users mock them? *The Washington Post*, (October 27, 2021)
<https://www.washingtonpost.com/outlook/2021/10/27/twitter-amplifies-conservative-politicians/> (参照日2021年11月1日)
- Byrne, D. (1971). *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- Colton, C.C. (1820). Lacon: or many things in few words addressed to those who think. London: Longman, Hurst, Bees, Orme, & Brown.
- Fiedler, F. E., Warrington, W. G., & Blaisdell, F. J. (1952). Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 790-796.
- Gray, J. (2003). New audiences, new textualities: Anti-fans and non-fans. *International Journal of Cultural Studies*, 6, 64-81.
- Gray, J. (2005). Antifandom and the moral text: Television without pity and textual dislike. *The American Behavioural Scientist*, 48, 840-858.
- Haidt, J. (2003). The moral emotions. In R. J. Davidson, K. R. Scherer, & H. H. Goldsmith (Eds.), *Handbook of affective sciences* (pp. 852-870). Oxford: Oxford University Press.
- Harman, S., & Jones, B. (2013). Fifty shades of ghey: Snark fandom and the figure of the anti-fan. *Sexualities*, 16, 951-968.
- 広沢 俊宗・小城 英子 (2005). プロ野球ファンに関する研究 (I) - 阪神ファンと巨人ファンの比較 - 関西国際大学地域研究所叢書, 2, 3-18.
- 堀 啓造 (2005). 因子分析における因子数決定法 - 平行分析を中心にして - 香川大学経済論叢 / 香川大学経済研究所編, 77, 35-70.
- Huszár, F., Ktena, S. I., O'Brien, C., Belli, L., Schlaikjer, A., & Hardt, M. (2022). Algorithmic amplification of politics on Twitter. *Proceeding of the National Academy of Science of the United States of America*, 119, e2025334119.
- 今田 純雄 (2019). 嫌悪感情の機能と役割 - Paul Rozinの研究を中心に - エモーション・ス

- タディーズ, 4 Special Issue, 39-46.
- 川西 千弘 (1993). 対人認知における顔の影響 心理学研究, 64, 263-270.
- 河野 和明 (2019). 排斥の適応論と現代日本人の嫌悪対象集団について エモーション・スタディーズ, 4 Special Issue, 54-64.
- 河野 和明・羽成 隆司・伊藤 君男 (2013). 「接触回避尺度」開発の試み 東海学園大学研究紀要: 人文科学研究編, 18, 155-161.
- 河野 和明・羽成 隆司・伊藤 君男 (2014). 他者から嫌われることを避ける傾向の個人差 東海学園大学研究紀要: 人文科学研究編, 19, 155-165.
- 河野 和明・羽成 隆司・伊藤 君男 (2015). 対人嫌悪の理由と対処の関係ー被嫌悪回避傾向を考慮して 東海学園大学研究紀要: 人文科学研究編, 20, 127-137.
- Kilgo, D. K., Harlow, S., García-Perdomo, V., & Salaverria, R. (2018). A new sensation? An international exploration of sensationalism and social media recommendations in online news publications. *Journalism*, 19, 1497-1516.
- 小城 英子 (2002). ファン心理の探索的研究 関西大学大学院『人間科学』, 57, 41-59.
- 小城 英子 (2018). ファン心理尺度の再考 聖心女子大学論叢, 132, 182-224.
- 小城 英子・薊 理律子・小野 茜 (2010). スキャンダルとファン心理 聖心女子大学論叢, 114, 99-133.
- 楠見 孝 (2018). リテラシーを支える批判的思考ー読書科学への示唆ー 読書科学, 60, 129-137.
- Maltby, J., & Day, L. (2017). Regulatory motivations in celebrity interest: Self-suppression and self-expansion. *Psychology of Popular Media Culture*, 6, 103-112.
- 増田 真也・坂上 貴之・森井 真広 (2019). 調査回答の質の向上のための方法の比較 心理学研究, 90, 463-472.
- 増井 啓太・田村 紋女・マーチ, エヴィータ (2019). 日本語版ネット荒らし尺度の作成 心理学研究, 89, 602-610.
- 松井 豊・江崎 修・山本 真理子 (1983). 魅力を感じる異性像ー同性の推測と実際とのズレー 日本社会心理学会第24回大会発表論文集, 44-45.
- 松尾 直博 (2002). 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向 教育心理学研究, 50, 487-499.
- 道田 泰司 (2003). 批判的思考概念の多様性と根底イメージ 心理学評論, 46, 617-639.
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2015). オンライン調査モニタのSatisfice行動に関する実験的研究 社会心理学研究, 31, 1-12.
- 水川 あさみ (2021). 水川あさみ公式Instagram
<https://www.instagram.com/p/CVg6PIGJFAh/?hl=ja> (参照日2021年11月1日)
- 水野 邦夫 (1999). 対人的好悪感情と対人認知の関連について 聖泉論叢, 7, 55-68.
- 文部科学省 (2020). 情報化社会の新たな問題を考えるための教材～安全なインターネットの使い方を考える～指導の手引きー令和2年度追加版ー
https://www.mext.go.jp/content/20210406-mxt_jogai01-100003206_001.pdf (参照日2021年11月1日)
- 向居 暁 (2020). アンチファン心理の構造ーアンチファン態度とアンチファン行動の関連性ー

- 日本社会心理学会61回大会発表論文集, 12.
- 向居 暁 (2021). パーソナリティ特性とSNS利用がアンチファン心理に及ぼす影響(1)―重回帰分析による検討― 日本社会心理学会第62回大会発表論文集, 38.
- 向居 暁・竹谷 真詞・川原 明美・川口 あかね (2016). ファン態度とファン行動の関連性研究紀要, 64・65, 233-257.
- 中田 龍三郎・久保 (川合) 南海子・岡ノ谷 一夫・川合 伸幸 (2018). 高齢者は渋滞時に攻撃性が高まる―運転シミュレーターと近赤外線分光法 (NIRS) を用いた研究― 発達心理学研究, 29, 133-144.
- 野上 達也 (2016). SNS上における誹謗中傷行為の発生条件に関する研究 安心ネットづくり促進協議会「2015年度研究成果報告」
<https://www.good-net.jp/files/original/201711012220218526010.pdf> (参照日2021年11月1日)
- 斎藤 明子 (2003). 对人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究 九州大学心理学研究, 4, 187-194.
- 笹川 喬介・和泉 順子 (2013). 誹謗中傷問題のインターネットによる影響に関する考察 研究報告電子化知的財産・社会基盤 (EIP), 27, 1-6.
- 大宅 壮一・大宅 映子 (2017). 大宅壮一のことば「一億総白痴化」を予言した男 KADOKAWA
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R. (2000). Disgust. In M. Lewis, J. M. Haviland-Jones, & L. F. Barrett (Eds.), *Handbook of emotions* (pp. 637-653). (2 ed.). New York: Guilford Press.
- Schieman, S. (1999). Age and anger. *Journal of Health and Social Behavior*, 40, 273-289.
- 総務省 (2019). 令和元年度版情報通信白書
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/pdf/01honpen.pdf> (参照日2021年11月1日)
- 総務省 (2021). インターネットトラブル事例集 (2021年版)
https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/pdf/trouble_book2021.pdf (参照日2021年11月1日)
- 小学館 (2019). デジタル大辞泉 (ver.201912) 小学館
- 平 和博 (2021). アンチによる「炎上」が支えていた? TwitterのAI「右派推し」の原因とは
https://kaztaira.wordpress.com/2021/11/01/anti-conservative_people_may_amplify_conservative_tweets/ (参照日2021年11月1日)
- 豊田 弘司 (1998). 大学生における嫌われる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, 34, 121-127.
- 高橋 優香・黄 景逸・阿部 恒之 (2018). 有名人のゴシップに対する社会的評価 日本心理学会第82回大会発表論文集, 227.
- Thorndike, E. L. (1920). A consistent error in psychological ratings. *Journal of Applied Psychology*, 4, 25-29.
- Velicer, W. F., & Fava, J. L. (1998). Affects of variable and subject sampling on factor pattern recovery. *Psychological methods*, 3, 231.
- Yahoo! JAPAN (2021a). Yahoo!ニュース, コメント欄の健全化に向けた取り組みを強化
<https://about.yahoo.co.jp/pr/release/2021/10/19a/> (参照日2021年11月11日)
- Yahoo! JAPAN (2021b). Yahoo!ニュース コメントポリシー (2021年3月25日改定)

<https://news.yahoo.co.jp/info/comment-policy> (参照日2021年11月11日)

吉田 寿夫 (1998). 本当にわかりやすいすごく大切なことが書いてある語句初歩の統計の本 北
大路書房

注) 本研究の一部は以下で発表された。

向居 暁 (2020). アンチファン心理の構造—アンチファン態度とアンチファン行動の関連性—
日本社会心理学会第61回総会発表論文集, 12.

Abstract

Relationships between anti-fan attitudes and anti-fan behaviors

Akira Mukai & Misato Kasaoka

Extreme behavior by anti-fans, such as malicious comments on public figures in social media, has become a social problem. In the present study, an anti-fan attitude scale and an anti-fan behavior scale were developed, and relationships between anti-fan attitude and behavior were investigated, as were subtypes of anti-fan attitudes and their anti-fan psychological features, in order to understand the anti-fan psychology which is assumed to be generally present in everyone's mind. Exploratory factor analyses revealed that the anti-fan attitude scales had 7-factor structure, which is composed of "dislike for arrogant behavior", "dislike for poor quality and ability of works", "dislike for lack of common sense", "joy of sharing dislike and Schadenfreude", "dislike for differences with oneself", "dislike for appearance" and "dislike for lack of trustworthiness", and the anti-fan behavior scales had 4-factor structure, which is composed of "aggressive anti-fan behavior", "on-line criticism", "rejective anti-fan behavior", and "off-line criticism". Multiple regression analyses revealed that "joy of sharing dislike and Schadenfreude" intensely affect "aggressive anti-fan behavior" and "on-line criticism", which are especially likely to become social problems. It is also found that "dislike for lack of common sense" has an effect on these anti-fan behaviors. Cluster analysis indicated that there are 5 types of anti-fan attitude subgroup, and their features in anti-fan behavior and genres of disliked public figures are explored.

Key words: anti-fan psychology, interpersonal dislike feelings, psychological scale development